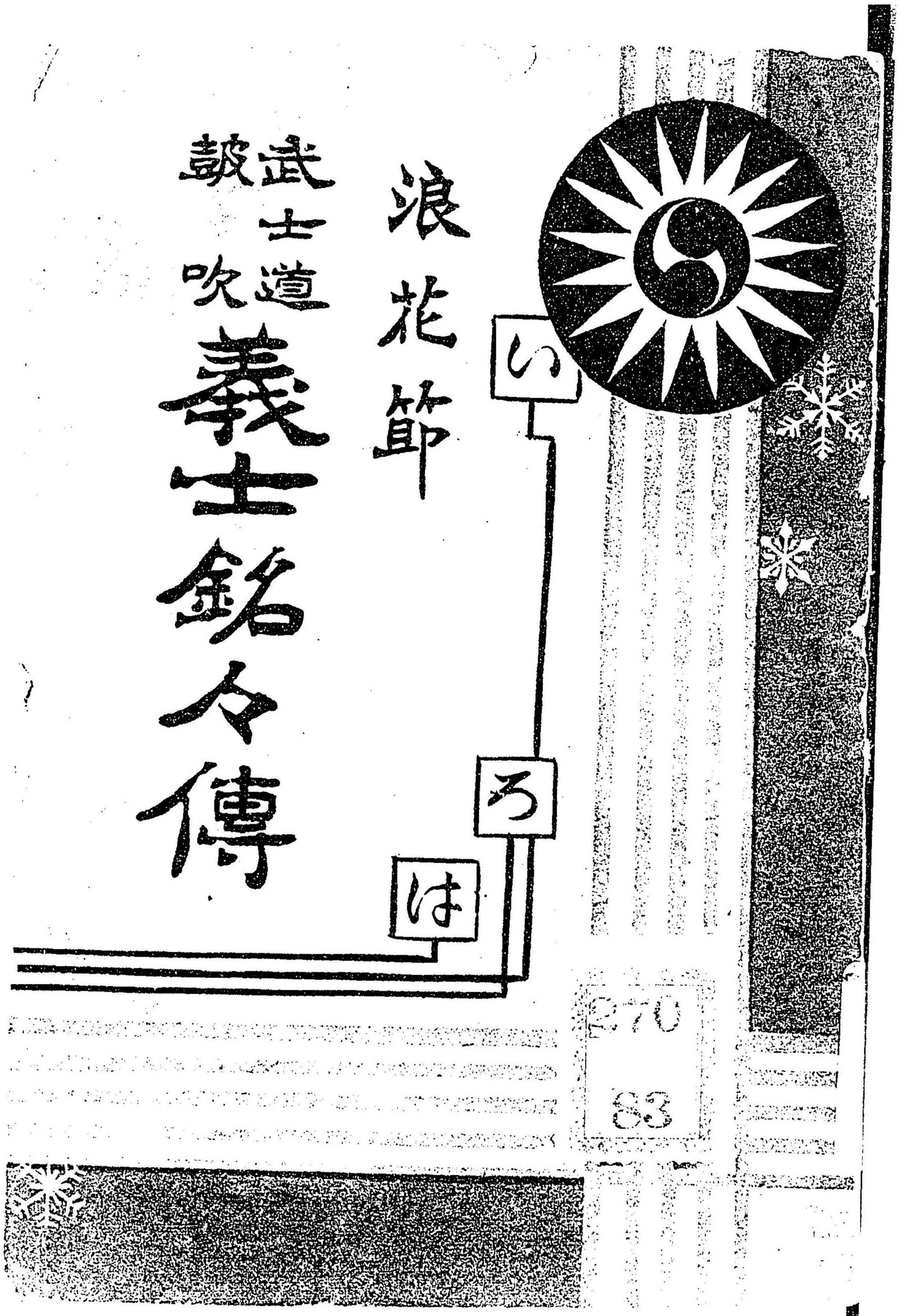

浪花節

武士道
鼓吹

義士銘々傳

特64
360

京山大教

東家愛樂

武士道鼓吹

45. 5. 2

武士道鼓吹

義士銘々傳

京山大教口演

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

越後の國新發田の城主五萬石、溝口伯耆守殿家來、郡奉行を勤め三百石を頂戴を致して居りました、中山安左衛門と云ふ人の一子に安太郎と云ふのが御座いました、此の安太郎に菅野六郎右衛門の妹お八重を娶る約束を致し、然るに安太郎は小菊と云ふ藝者に深く馴染め、お八重と安太郎は婚禮の曉に小菊の手を引て、姿をかくしました、小菊と安太郎の間に出來たのが、此の安兵衛で御座います、藝者の腹からは都々逸に甚句より外に出ないと思ひましたが、安兵衛の樣な人が生れました、安兵衛は幼名を安吉と申しました、最初より伺ひますと、中々一席では讀終りになりません故、高田の馬場十八番切の處を伺ひます、堀部の家に養ふにな

つて堀部安兵衛となりましたが、淺野家へ贈身をしない以前は、中山安兵衛で御座いました、武庸は江戸表へ出府を致し、神田の紺屋町に道場を開いて居りました堀内源太左衛門正親と云ふ人の門人で御座いました、一説には上州眞庭の樋口十郎左衛門の門弟で、念流を學んだと申しますが、全くは堀内の門弟で御座います、若年の折は隨分亂暴をした人で、けれども柄のない處へ柄をすげて喧嘩を賣る抔と云ふ人では御座いません、赤鞘の安兵衛酒を飲むと無暗に理屈を云ふので、グズ安とも云ひ、或は吊ひ安なんと云ふ人があります、イロ〳〵な異名が付て居る、八丁堀の川口町の穴藏屋金八の處へ安兵衛武庸は世話になつて居りました、夫れ

より穴藏屋の先の荒物屋の裏に一軒の家を借り其處に居りました
然るに伯父の菅野六郎右衛門の有所を探して居りますと、麻布の
狸穴に伯父が道場を開て居り、始めて知れました故伯父の許へ訪
れまして、伯父の六郎右衛門よりも餘り酒を飲むので、深く戒め
られました。六郎右衛門は縁あつて伊豫の國西條の城主三萬石。
松平左京太夫殿へ二百石を以て御召抱へになり。其内に何んとか
安兵衛を何時迄も浪人をさして置く譯にも參りませんから。何れ
へか推擧を爲やうと。伯父は頻りに心掛けて居りました。スル
ト青山穩田の御上屋敷で三月の三日上己の節句の當日。家中の重
立たる人々は穩田の御座敷へ集り。無禮講と云ふので。自分の上

下を論せず、盃の遣り取りを致し、殿樣よりは一同に御挨拶があ
り、跡は頻りに盃の酌交せを致して居りましたが

庄「アイヤ菅野氏、甚だ失禮ぢやが少々御聞き申したいことがある、貴殿は新規御召抱へになり、二百石の高祿を頂戴爲して居られるが、侍を千日養ふのは只一時の役に立んが爲なり、今日と云ふ今日貴殿に此處で會たのが何よりの幸ひ、貴殿の御手の内を拜見を爲たい」、云はれた時に六郎右衛門殿は、ソロ〳〵初つたわイと思ひ

斯う云ふ者には却て逆つては面倒と思ひ、

六「見られる通りの吾等は老體で御座る、御覽に入れる丈け業は御座ひません、庄「イヤ夫はナ、拜見をしたイと云ふのは兜試しのことで御座る、幸ひ是へ持參をした此の兜の八幡坐を貴殿に割て頂きたいと持參しました」、六郎右衛門の前へ桃形の兜を出した、何故庄左衛門が今日兜を持參をしたかと云へば、菅野六郎右衛門は新參者で御座いますが、家中の評判が宜ふ御座いますか

ら、何んとかして菅野を御當家から追拂ってしまはうと考えて居りました、兜試しをさして割ない時は、さん〳〵嘲り笑つてやれば、此席上に居たゝまれず、必ず此場を逃げてしまうだらう、然うなれば當人も自然と當家に居たゝまれず、立去るだらうと思ひました故、　庄「菅野氏、是非拜見をしたイ、　六「イヤ何うか其儀は御用捨を願ひたい」、再三再四庄左衛門兄弟が勸めますから、六郎右衛門殿は餘りと云へば村上兄弟が夏蠅故、　六「然らば割るか割らないか却て物笑ひの種となりますが、御覽を願ひたい」と六郎右衛門殿は立上り、夫へ水を取寄せ懷中よりも半紙一帖を出して、是を水をひたして、桃形の兜の八幡坐へ載せ、

エイ、ヤツ、と云ふ聲、村上兄弟を始め其他一同の人々は、如何に菅野が腕前秀て居たにもせよ、此の兜は割る筈はないと思ひ、割ざる時は思ふ存分笑つてやらうと云ふつもりで見て居りましたが、カチツと云ふ音と共に切り下した奴は、兜は美事に二ツに割た、村上兄弟を始め並居る一同は菅野の腕に恐れて暫時の間、座中寂として水を打つたる如く、只感心して聲も出ません、村上兄

弟の顔色は眞青になり、襷鉢巻を取り除けた六郎右衛門は、一刀の刀形を調べると少しの疵も御座いません、　六「誠に御一同失禮を致しました、此の上は御兄弟の御腕前を拜見を致したう御座る」

庄左衛門も六郎右衛門の様な老人が遣るんだから、割ぬこともあるまいと、新たに一ツの兜を夫へ持て參り、一刀の鞘を拂つてやつて見たが、割る處か少しく疵が付た位ゐだ、一同の人々は是を見て思はずもドッと吹出して笑ひました、此の折六郎右衛門〳〵と云ふ聲、正面の襖がサッと開き、夫へ御立出に相成つたのは太守松平左京太夫殿で御座いまして、六郎右衛門は兩手を投て頭を下げた、　殿「六郎右衛門、年こそ老て居るが只今の腕前褒置ぞヨ

改めて盃を取らすると、手づから御盃を六郎右衛門は頂戴致しまして、　殿「六郎右衛門、今日其方の兜試しは、過る永祿の四年九月、西條山の頂きより上杉謙信が備前長光の大刀を振い、信玄の旗元へ乘り込み大久保内膳が鐵砲を持ち、一發の許に謙信を射殺さんと爲し、此時遲し彼時早く、謙信は持る長光の刀にて、内膳の鐵砲を半ばより切落した話は豫て聞き及んで居たが、今日其方の兜試し、見ぬ昔の謙信の車が〳〵りを目前に見る樣ぢや」武術の御質問がいろ〳〵御座いました、

村上兄弟は友範の許へ訪れる、此の友範は兄弟の師匠で御座いまして、直様案内と共に師匠の居間へ通り、『偖先生、今日吾々兄弟は青山穩田の屋敷に於て、上の御前で菅野の爲にコレ〳〵の敗をとりました、何んとか宜い御考へは御座いますまいか、最早吾々兄弟は屋敷へ戻ることが出來ません、』友『ウン、夫は何うも

困つたことが出來たナ、未だ一面識も致したことはないが、名前は豫て聞て居る、菅野は頗る腕前の出來ると云ふのは聞き及んで居る、其方も左樣な譯であつて見れば、屋敷へ戻れないのは無理はない、然し縁あつて其方と師弟の縁を結だ上は、吾等の及ばざる所は其方の力をかり、其方の力で及ばん事は速に吾等の意の如く爲なければならぬ。』『何うしたら宜う御座いませう、』友『夫れぢやア村上、菅野の許へ決闘狀を送り、明日と云ふ譯にもゆくまいが、明後日高田の馬場へ彼を引出し、御前方兄弟が及ばんければ、吾等も助勢致し其他門弟の者も引連れ參る故、速に其場所にて切てすてた方が宜らう、村上兄弟は萬事宜しき樣に御願い申し

ます」、と師匠友範に頼み、イヨ〳〵村上兄弟より菅野六郎右衛門の許へ決闘狀を送りました、六郎右衛門は此の決闘狀を見ると、左り封じになつて居ります、直ちに返書を認めて村上兄弟の許へ送りました、三月の五日が當日になり、菅野は御支配所の所まで書面を以て届けて置き、別に鎖帷子等の支度も致しませんで、小者の喜助を呼で、

六「喜助や、」　喜「へー旦那さま何か御用で、」

六「御前氣の毒だが八丁堀の中山の處まで此手紙を届けてはくれまいか、行きには急いで往つて歸りには悠然歸つて參れ、」　喜「畏りました、」　六「喜助御前が腰の物が常に慾しいと云つて居たが、是は持古しではあるが御前にやるから、」　喜「何うも有難ふ御座い

ます、」　六「夫れぢやア頼むぞヨ」　喜助は何んの心もなく八丁堀を指して出て行きました」、菅野六郎右衛門は正午時と云ふので、刻限までは高田の馬場へ乘り込んければならんと、ソコ〳〵に支度をして出懸けました、誰にも告げません、喜助は道を急いで八丁堀川口町中山安兵衛の許へ參りました、

何れも勇氣は凛々として菅野の來るのを今や遲しと待受けて居りました、見物一同は今に來るかしと相手の來るのを頻りに延上り左右を見て居りました、處へ、

○「少々御免しを願ひたい、少々御免を蒙りたい、中々見物はどく處ぢやア御座いません、

○「エー何うも前の方が些とも動きませんので迚も動けません、

六「手前は當の相手で御座います、菅野六郎右衛門で御座る、

○『へエー、旦那がですかイ』、と見物は驚いて。脊の高さが六尺二三寸もあり、筋骨の逞しい立派な人だと思つて居りましたが、年頃はモー六十以上、腰が海老の様に曲つて居りますから、

○『エー旦那が皆なを相手にするんですかイ、○『左ればで御座る、夫れと云ふと一同は左右へ開いた、村上兄弟は目を皿の様にして四邊の様子を見廻して居りましたが、菅野六郎右衛門の姿を見ると、

庄『オー菅野殿、能うこそ御出で、何うかと思ひ最前より實は心配をして居た處、

六『是は〳〵村上御兄弟、御美事なる支度、定めし待遠で御座つたらう、吾等も武士のはしくれ、御返書を差出した以上は決して心變りは仕らん、

庄『オー菅野氏、お

支度を願ひたイ、『六郎右衛門は御話替つて中山安兵衛武庸は早朝よりも起出て、神田紺屋町の堀内源太左衛門先生の道場へ參り酒の相手を致して居りましたが、虫が知らすか武庸は、酒は飲ども少しも酔ず、己れの伯父の六郎

右衛門が高田の馬場へ乘込んで、大勢の者を相手に爲し、死に臨むとは露知らず、何んとなく心持が惡う御座いますから、ソコソに源太左衛門先生の宅を暇を告げ、八丁堀川口町の巳れが家を指して戻つて參り、　安『イヤ何うも只今戻つた、　○『オヤ安兵衛さん、今日は珍しいぢやアないか、何時も醉て歸つて來るのだが

安『イヤ婆さん、今日は心持が惡くつて歸つて來たのだ、誰も來なかつたか　○『安兵衛さん、お米屋から貸の催促が來たヨ、

安『然うか、他に誰も來ないか、　○『夫れからネ大家さんが家賃を取りに來たヨ、　安『夫れツきりかエ、　○『質のサが來て居るヨ

安『能くイロ〳〵な物が來るナ、婆さん腹が空たから飯を一抔出

してくんねエ、　○『仕樣がないヨ、安兵衛さん、一月の內半分位ひはお前妾の處でお飯を喰て居るんだヨ、　安『マア〳〵グズ〳〵云はずに飯を出してくれ、冗談を云いながら安兵衛は飯を喰ひ、今二膳目に替らうとすると、

つたヨ、　安『何んだ婆さん、又酒屋の催促か、　○『然うぢやアないヨ、菅野六郎右衛門と云ふ人からネ、お仲間が手紙を持て來たのだヨ、歸つて來たら直ぐ見せてくれろと云つたんだヨ、　安『ナニ菅野の伯父から、ドレ〳〵早く見せろ、取る手おそしと開封をして見れば、アッと驚く安兵衛武庸、コハ如何に今日高田の馬場に於て村上兄弟を相手に爲し、討つ討れるは時の運、萬一の事あ

つたる節は跡を何うか頼むと云ふ文面、安、オー婆ア、何故早く見せなかつたのだ、斯うしては居られんと、安兵衛武庸は關孫六の一刀を持ち、ヌックと立上り、

勝田新左衛門之傳

東家愛樂口演

フシ「君よりも惠を受けし、其恩は珠彌山よりも猶ほ高く、蒼海よりも猶ほ深し、義を泰山よりも重んじ、君の爲には命は鴻毛よりも猶ほ輕しと、赤穗四十七士の其内で、勝田新左衛門武堯の履歴を辯じ上げまする」、

義士四十七人の内、誰が仇討に就て餘計に苦勞をした、しないと云ふことは御座いません、何れでも一身同體で、亡君の爲に苦勞

を致しました、其内にも此の新左衛門武堯は淺野家譜代の臣にて討入をした時は年僅に二十三歳で御座います、若年ながら文武兩道に秀でまして、赤穗城明渡しになり、以來亡君の仇を報ぜんと江戸表へ出府致しまして八百屋になり、吉良邸の容子をば探つて居りました、此の新左衛門の妻は、下谷御徒士町に住で居りました御家人で、大竹重兵衛と云ふ方が御座いました、此の人の娘をおみつと云ふ、此女を妻に迎へて居りました、能く吾々の仲間で大竹の隱居と常に口演をして居りますが、隱居になる以上は世繼がなくては隱居は出來ないもので御座います、誰が演じまして大竹には娘一人あり、伜が御座いません、全く此の重兵衛殿には惣

領を忠太夫と云ひ、此の忠太夫は長崎奉行の手附で御座いまして長崎へ役向の爲に往つて居ります、其妹のおみつが新左衛門の妻になつて居りました、忠太夫と云ふ子息が御座いましたから、父の重兵衛殿は隱居を致して居ります、元祿の十四年四月赤穗城は荒木重左衛門、柳澤采女正の兩人が、城受取に參りました、一度は赤穗城に楯籠り、城を枕に討死と云ふ評議が御座いました其時に大石良雄が御金配當を致し、同志の心の内を探りました、何れも同家中の者は是に同意を致しました其中に、堅く約束をしたのが六十五人、是れ丈ケの人が明渡しが濟だ後、亡君の怨みを晴さんと誓ひましたが、又其内で變心を致した者が出て、始めて

四十七人になりました、新左衛門は江戸へ參りまして八百屋になつて、今日を送つて居りましたが、大竹重兵衛殿は悴新左衛門は赤穗で城を枕に討死をするであらうと思ひ居りますと、赤穗は遂に開城になりました、此上は必ず内藏助殿を始め同志の面々主君の復讐を果すに相違ないと推察して居りました、時にいよ〳〵一同は赤穗を離散を致し、江戸表へ入り込で來たと云ふことを風の便りで重兵衛殿は御聞きになり悴の新左衛門も必ず江戸表へ出府を致して居るであらう、若し江戸に居るなれば必ず共に尋ねて來さうなものだ、娘のおみつ丈けは元祿の十四年三月殿中で内匠頭様刃傷をした時、新左衛門は江戸詰であつたのが、長矩公田村邸

で切腹致され、赤穗許定の折おみつを自分の處へ托して、新左衛門は赤穗へ乘り込だのですから、モー是れ一年有餘にもなり、別に是と云ふ沙汰もなく、始終重兵衛殿は心にかけて居りましたが時しも元祿の十五年十二月　十三日早朝に起出で、小者の久助を連れて本所北割下水の保積勘十郎と云ふ、同じ御家人で御座いまして、此の許へ重兵衛殿は參り、用事を達して四ッ時分保積の宅を出て、恰度兩國橋へかゝつて參りました、

フシ「向ふの方より襤褸半纏を身に纏ひ、醬油で煮しめ味噌で色揚げをしたやうな手拭で頰冠り、葱の枯ツ葉のやうな三尺を猫結びにゝ結びつけ、

素足で草鞋穿、天秤を肩にとあてがいまして、前の笊を見ると賣殘りの大根が二三本御座いまして、後ろの笊を見ると、人參が五、六本其籠を擔ぎまして、ソヨと吹來る筑波おろしの其風は、寒風凜々と致し、身體に石針を刺かと思はれる寒さに向ひ、ブラリ〳〵と參りました一人の八百屋」、

大竹重兵衛殿は、ハテ見たことのある男だワヘと、近づいたのを見ると、己れの娘おみつの夫新左衛門武堯で御座いますから、

「オー新左衛門ではないか」、云はれた時に其八百屋は吃驚いたして重兵衛殿の顏を見て、冠つて居りました手拭を取り、「イヤ是は何誰かと思ひましたら、舅殿で御座いましたか、新左衛門斯の如き服裝をして居る處を御覽に入れ、面目次第も御座いません、」「新左衛門何うした、其方は赤穗表へ乘込む時にみつを賴むと申すによつて、確と預つて遣はしたが、其後梨の礫の音沙汰なし、明け暮其方の身の上を思はぬ日とては只の一日もない位ゐ赤穗城を離散になり江戸表へ出府致したことは聞き及んで居たが斯樣な處で其方に面會を致さうとは思はなかつた、其方も立派な武士ではないか、浪人の身とは云ひながら豈夫斯樣な姿を致して

居らんでも、何んとか身の立てやうもあるであらうに、情けない奴だの、　新『イヤ是は舅殿何んとも御詫の申さう樣も御座いません、斯樣に零落ましたのも誰を怨む處も御座いません、皆己れの至らざるが爲め斯樣に零落を致しました、夫故江戸表へ參りましても舅殿の方へは參り兼、定めし見下げはてた奴と思召も御座いませうが、新左衛門も武士のはしくれ、何時までも斯樣な業は致しては居りません、何れ其内に御詫がてら參上致すで御座いませう、　重『何に何れ其内に、何れ其内と云ふ云ひ分があるか、明日にでも我宅へ參れ、何んとか其方の身の立樣に致して取らせるから、　新『是は千萬忝ふ御座います、遂斯樣に零落た爲め舅殿方

へ參り兼遠慮を致して居りました、明朝になれば相違なく參上致します故、何うぞ其節は宜しく御願ひを申上げます、　重『新左、只今は其方は何れに居るのだ、　新『左樣只今の處一寸申上げますので、明日は相違なく伺ひます、　重『オー然らば明朝相違なく參れよ、』と別を告げて重兵衛殿は御徒士町の宅へと戻りましたみつ『阿父さまお歸り遊ばせ、今日は嘸ぞ御寒ふ御座いましたでせう、　重『何うも實に寒かつたの、大分雪模樣をして來たの、みつ『阿父さま大分御顏の色が惡ふ御座いますが、何うか遊ばしましたか、　重『オー別に氣分も惡ふないと、ズツと奥へ御入りになり、　重『みつや、只今新左衛門に會た、　みつ『オヤ何處で御會に

なりましたか、とおみつは左も嬉しさうに膝を進め、　重「おみつ餘程嬉しいと見へるの、　みつ「イ、エ、　重「イ、エちやあるまいみつ「アノ阿父さま、何處で御會になりました、　重「兩國の橋の上で、　みつ「オヤ左樣で御座いますか、何う云ふ御服裝でありました、　重「流石は新左衛門、其方の夫だけあつて、立派な葱の枯ッ葉の樣な三尺を〆め、手拭を頬冠り、天秤を肩にあてがイ、素足に草鞋穿で、大根が笊に入つて居た、　みつ「アレ阿父さん御冗談ばかり仰せになりまして、　重「イヤ冗談ではない、實は新左衛門は是れ〳〵の風をして居つて、八百屋をして居たヨ、　みつ「オヤ阿父さま眞實て御座いますか」、とおみつも餘りのことに父重兵衛

の顏を見つめて居りました、　重「何うだみつ驚いたらう、話を聞てさへ驚くのだ、吾等は見たのだから其時の吾等の身になつてくれろ、豈夫に新左衛門が八百屋にならうとは思はなんだ、みつ「して阿父さん、何處に居ると申しました、　重「別に何處とも聞たが云はなかつた、明日間違なく參ると申したから、明日は參るだらう、　みつ「オヤ左樣で御座いますか」、と其日は重兵衛殿は何んとなく欝ぎ勝で御座いまして、日の暮方からチラリ〳〵と降て參りました、何時と違ひ心持が惡いし殊に雪が降て參りましたから、重兵衛殿は早く御休みになりました、然う斯うする內に程なく夜も明離れ、重兵衛殿が起出て戸を開いて庭を見ると、雪が盛に降

て居りまして、　重『みつや、此の工合では大分今日は積るだらう是ヨ、なべや、　なべ『ハイ、旦那様、何か御用で御座いますか、　重『今日怜新左衛門が參るから、參つたら速に此方へ通す様に、なべ『アーお武家様で御座いますか、　重『イヤ元は武家であつたが仔細あつて今は八百屋になつて居るのだ、宜いか其つもりで案内を致せ、　なべ『畏りました、房州生れの女中のおなべは臺所で頻りに働いて居りますと、　○『へエー今日は、　なべ『何誰。　○『へエー八百屋で御座います。　なべ『オヤ然うで御座いますか。何うぞ玄關の方へお廻りを願ひます。　○『へエー何うも有難ふ御座います』。八百屋は何も知らないから玄關へ廻りました。　なべ『アノ

旦那さま。お婿さまがお出になりました。　重『何に新左衛門が參つた。何處へ。　なべ『アノ勝手へお出になりましたから。お玄關の方へ廻る様に然う申しました。　重『オー然うか。大事ないから速かに是へ通せ。　なべ『畏りました。アノお婿さま何うぞ此方へお上りを願ひます。　○『何うも有難ふ御座いまして。始めて參りましたのですから何か御買上げを願ひます。　なべ『何うぞ此方へお上んなさい。　○『草鞋を穿て居りますから何うぞ此處で。　重『なべや何をグズ〳〵して居る』。重兵衛殿は夫へズイとお出になり。　重『何をして居るなべ。　なべ『旦那さま中々お上りにならないです。　重『何れ』。　と重兵衛殿が見ると。全然で人が違ひ。　重『コ

レなべ、全然人が違ふではないかこんな。者ぢやアない、コレ八百屋何んと心得て玄關へ廻つた、早く出て行け」、八百屋は驚いて何うかお上んなさいと云ふから、叮嚀な家だと思つて居たら人違ひだと、驚いてソコ〳〵に荷を擔いて出てゆきました、重「なべ、貴様の様に疎忽ひ奴はないぞと、小言を云ひながら奥に入つた、

○「今日は八百屋で御座います、」なべ「オヤ八百屋さんかエ、一寸何うぞお待なすつて下さい、貴下は何んと云ふお名で、」○「へイ新左衛門で御座います、」なべ「オヤ左様で御座いますか、何うも失禮を致しました、何うぞお玄關の方へお廻りを願ひます、且那さまお婿さまが入らつしやいました、」重「今度は全くか、

なべ「左様で御座います、何んと云ふお名ですと、聞きましたら、新左衛門だと仰せになりました、」重「オー來たか、みつ、新左衛門が參つたぞ、」みつ「オヤ左様で御座いますかと、早くも鏡に向つて櫛を取り上げ、衣紋をつくろひ其儘に玄關へ出て參りました見ると新左衛門の姿は見へません、」みつ「おなべや、」なべ「ハイみつ「何處にお出だイ、」なべ「アノ一寸何うぞ此方へ、」○「ハイ今日は大根に午房人參で御座います、」みつ「オヤおなべや、お前は眞實に困るヨ、此人ぢやアないヨ、」なべ「オヤ又違ひましたか、だッてお名前が新左衛門と云ひましたから、」○「ヘエー大根に午房人參如何でせう、」みつ「八百屋さん別に何も要らないからお歸

り、○「へエ左様ですかイ、又何うぞお願ひ申します、八百屋はけゞんな顔をして出て往つた、おみつは力なげに奥へ入りました彼是四ッ頃ほひ、○「頼む、お願ひ申す、みつ」なべや何誰かお出になつたヨ」、おなべは玄關へ出て見ると、

フシ「年の頃はひ廿五六才になりまする、色の淺黑き眼はパッチリ、鼻筋ごほり口元尋常で、身はに霜降羅紗の長合羽を羽織りまして、絽色鞘の兩刀を帶し、銀杏齒の下駄にと身を載せ、澁蛇の目の二段はちきの傘を左りの手に持まして、

其跡には赤合羽に饅頭笠、一人の小者は腰をかゞめて控へて居り」、

なべ「何方からお出で御座います、○「舅御は御出か、なべ「ハイ何方からお越で御座います、○「身共は新左衛門である、

なべ「オヤ能く入らつしやいました。一寸何うぞお待を願ひます旦那様今度は全く眞物のお婿様がお出になりました、重「なべ、又人違ひではないか、なべ「イ、ヱ、重「どんな姿で參つた、

なべ「お立派な支度をして大小をお帶になり、お供を一人お連れになりまして御座います、旦那さまが八百屋さんだと有仰いましたが、大小を帶てお出の處を見ると普通の八百屋さんでな

く、公方様のお出入の八百屋さんですか、　重『是れつまらんこと を云ふな、速に是へ通せ、　なべ『何うぞ此方へ』、と案内と共に新左衛門武幸は夫へ參り、　重『オー新左衛門參つたの、　新『是は是は昨日は誠に失禮の段御免しを願ひ度イ、　重『新左衛門大層今日は立派な支度をして參つたな、　新『偖て眞殿、永らくの間浪々中は一方ならざる御高意を蒙り、何んとも御禮の申さう樣も是れなく、昨日手前宅へ戻りし處へお喜び下さい、伊達家より八十石を以て一刀流劍法指南役に抱へに參り、最も二ケ月程以前よりも知り人に賴み急ぎましたが、やう〳〵昨日事きまり今日是より新淺坐の伊達邸へ參る約束を致し、一寸お知らせ旁罷出ました、永

くの間みつをお世話を相願ひましたが、是より屋敷に參り、兩三日經た上改めて引取に參りますから、何うか御承知を願ひます、

重『オー、偖は新左衛門其方は伊達家へお抱へになつたのは夫は何より芽出度と、

『重兵衛殿は口には云へど、心の内には今迄亡君の仇討を致すであらうと心得しに、見さげはてたる新左衛門と、内に努を現はして、外には少しも現はさず』、

重『コレみつ、其方も永くの間我許で究屈であつたらう、兩三日

經ば新左衛門の許へ參ることが出來る、喜ばしひであらう、

新「就まして手前の身祝ひで御座いますから、今日は一盞汲かはし度、此儀御承知を願ひます、」重「ヤー新左、夫れは云はないでも此方より望む處だと、酒肴を取寄せて親子夫婦が鼎になり、睦しさうに酒酌かはし、新左衛門武堯は、

「フシ」酒は飲ごも心は酔ず、今宵限りの命ご思ひ、心の憂き面に出して舅殿にご悟られまじご、話を脇へご紛らし」、

新「イヤ何うも長話を致し、誠に失禮を致しました、是にてお暇を仕りまのせう、」重「新左衛門悠然致して參れ、」新「少々急ぎます故、」重「未だ宜いではないか、久しぶりで參つたのだから、モー少々飲で往つたら何うだ、」新「是より伊達公へ初見參で御座いますから、餘り酩酊をして參りましては、」重「新左、モー少し位ゐ飲で往つても此の寒さでは向ふへ行く迄には、大概酔がさめてしまう、」新「イヤ此後又ゆるゝと伺ひますから、其節に致しませう」、と其處を立上り、然らば御機嫌宜しふと、」新「みつ其方にも隨分苦勞をかけだが、聞く通り伊達公へ仕官の身になつたから安心を致して呉れ、暇を告げて、」新左衛門は、

「フシ」心の内に思ふ樣、是が親子夫婦の此の世の

名殘かと思へば、足も何んとなく進み兼、立關の方にと出て參り勝手口に御料理を頂戴致して居りました小者は、身分は足輕なれども忠義にこつたる寺坂吉右衛門なり」、

夫れお歸りと云ふ女中の聲に吉右衛門もソコ〳〵に、暇を告げて新左衛門の供をして參りました、重兵衛殿は新左衛門が伊達公へ仕官の道がついたと云ふのを聞て、何んとなく心持が惡くなり、重兵衛殿は性質廉直の御人で御座いまして、ヨモヤ新左衛門が二君に仕へる樣なことはあるまいと思つて居りましたが、伊達公へ

隨身をしたと云ふのを聞て、内心に怒を含んで居りました、娘のおみつは夫が仕官の道に就たと云ふので、大層喜んで居りました重兵衛殿は其夜は九ッ頃ほい迄まんじりとも睡につけません、おみつも同じく臥床ましたが、是も何んとなく胸さはぎがして睡につけません、夫は其筈で、

「親子は一世夫婦は二世と堅く契りを結びたる夫新左衛門は降來る雪を松火に、吉良の屋敷へ討入りし數名の者を相手にし、血汐を以て雪を染め死骸を積んで雪を消し、修羅の巷の眞最

中』、

偖其夜も程なく明はなれまして、雪の明日は裸虫の洗濯と云ふことが御座います、大竹殿は昨晩は祿に寢もやらず、明方よりトロ〳〵とまどろみ、五ツ半時分になりやう〳〵目をさまし、起出て手拭を提げて梅の湯へ參りました、一説には大竹重兵衛を旗本と云ふ人が御座いますが、是は御家人で御座いました、旗本なれば町の湯へ行かなくツても、大概家に風呂が立ます、風呂へ參つて身體を清めて居りますと、大聲で、○『サア〳〵出ました〳〵昨夜本所松坂町の吉良左兵衛督殿屋敷へ淺野浪士が四十七名の人々が夜討をかけ、隱居上野介殿の首を討取り泉岳寺へと引揚の始末

が委しく判つて代價は僅か二十四文で御座い、サア〳〵御覽じろ豫て皆さんもお聞き及びでも御座いませうが、昨年三月十四日播州赤穗の城主淺野内匠頭長矩殿が、殿中松の御廊下で吉良樣へと刃傷致し、夫が爲に當日切腹、家名斷易となりました、然るに淺野家の城代家老大石内藏助殿を始め一同の方々が討入の顚末が委しく判つて二十四文で御座い』、と大聲をはりあげて梅の湯の前を怒鳴て居ります、是を聞くより大竹殿は

『裸體のまゝ表の方へと駈出したり』、

重『コレ呼賣屋、』○『ヘエー』、呼賣屋は見ると驚いた裡體だ、

重『コレ呼賣屋、一枚見せろ、』○『何うも有難ふ存じます、

重「コレ氣に叶た名前があれば買てやるし、氣に叶んければ買ないイ、　○「夫やア旦那困ります、讀で見て氣に叶ないから買ないと云はれては商賣になりません、　重「氣に叶たら殘らず買て遣る、早く出せ、　○「へヱー」、重兵衛は夫を取りあげて、　重「何に大石内藏助、オー内藏殿、是迄の貴殿の苦心の程はお察し申ます、斯こそあらんと心得しが、アー實に恐れ入つた、何に主税良金、主税殿、アー貴殿は未だ十五歳の御幼年恐れ入つたものだ、親御と昨夜の働きの程感心仕つた、オー堀部彌兵衛殿居られたか、アー御年を召して居るが盛んなもの、恐入つた、千葉三郎兵衛、富森助右衛門、貝賀彌左衛門、磯貝十郎右衛門、大高源吾、前原伊

助、武林唯七、是は何うも恐れ入つた、揃ひも揃ひ、　○「旦那際物ですせ、恐入つた〳〵ぢやア困ります、早くしておくんなさい　重「待て〳〵、潮田又之亟、堀部安兵衛、中村勘助、オー居たか新左衛門、居たか新左衛門と」、云ふより早く蒟蒻板摺の紙を握つた儘、

「重兵衛殿は我家をさして、　一生懸命に駈出したり、

呼賣屋は驚ひた、往來の人も十二月の十五日、お天氣とは云ひながら雪上りの其中をば躶體で老人が駈行きますから、何んだらうと何れも後ろ姿を見送つて居りました、イヨ〳〵是より大竹殿、

娘のおみつの髷を切り、夫を手に爲し泉岳寺へと駈付けまして、新左衛門との、再會は後編を以て又伺ひます、

赤垣源藏重賢之傳

京山大教口演

フシ「時しも元祿十五年十二月十四日、降つもる雪や仇たる吉良邸へ、乘り込む浪士四十六人、赤き心の赤垣が君に報ずる忠勇義膽拙辨ながら辨じます」、

赤垣源藏重賢は淺野家、ん〻節は、二百石を頂き馬廻り役を勤め武藝は勿論文學の心得もあり、天晴人物と云はれました、主家の不祥が身の不祥となり、淺野家改易の後は江戸に參つて本所に浪宅を搆へ、密に吉良の擧動に目を注ぎ、時節あらば亡君の仇を報せんの心、スルと源藏の兄は脇坂淡路守樣の御留守居を勤めて三百石を領り、鹽山與左衛門と云ふ、是が能く源藏の面倒を見ます敵を謀るは味方よりとの諺もあり、折々源藏酩酊しては兄の許へ參り、心にもないくだをまく、

フシ「今日しも十二月十四日、降り出す雪は卍の如く巴の如く、見渡す限り銀世界、白樂天の詩

に雪は鵞毛に似て飛で散乱し、　人は鶴氅を着て
立て徘徊を爲す、　來つた先は芝汐止なる脇坂淡
路守樣上屋敷」、

赤合羽に饅頭笠、貧乏德利と名付けた德利を下げ、高下駄も鼻緒がゆるみ、稍もすると躓きそうになるを拇指に力を入れて、是を踏しめ、雪を分けながら門へかゝつて參りまして、源「御免を、塩山の小屋まで通ります、○「是は源藏殿で御座いますか、

源「今日は惡ひものが降ました、嘸ぞお寒いことで御座らう御免を」、と云ひながら笠へ手をかけ取らうとしたが、腮に確りこま結

びになつて居る紐、取ることが出來ない、笠へ手をかけてべり〳〵と取り、頭には臺坐ばかり殘つて、源「御免、行き過る、

フシ「跡を見送りし門番が、思はずもらす苦笑ひ」、

○「同役何うだイ、アノ態は、アー云ふ者が淺野家で士分だと云ふのだから潰れる譯だ」、とり〳〵噂を致し居る源藏は、塩山の臺所口へ廻り、ガラ〳〵と戸を開き、源「是れ竹居るか、竹「オヤ源藏樣で御座いますか、源「甚い雪ぢやナ、竹「惡いものが降ました、何んと御寒ひでは御座いませんか、源「雪は豐年の貢と申すが、斯ふ降られては叶はぬ、一寸是を取て呉れ、竹「オヤお珍らしいお德利で御座います、何んと申すんで御座います、源「ア

ハ、、、是を知らぬ程お前は宜い處の生れとも思はぬ、是はな貧乏德利と申す、珍らしい器ぢや、　竹『貧窮德利で御座いますか、

源『流石に屋敷奉公するだけあつて、貧窮德利とは申した、時にお兄上はお出か、　竹『今日は御殿へお上りで御座いまして、未だにお下りになりません、　源『ウン、御殿へお出になつた、何か御用か、　竹『殿様の圍碁のお相手だとか承はりました、　源『圍のお相手、夫れではお下りが遲くなるであらう、何時頃お出になつた

竹『左様で御座いますネ、八ツ少々過た頃お上りになりましたと存じますが、　源『左様か、今は何時ぢや　竹『モー七ッで御座いませう、　源『お姉上はお出であらうナ、　竹『居らつしやいますが、

生憎今朝からお癪氣で臥床てお在遊ばします、　源『何か御持病か

竹『御持病のお癪で御座います、　源『ウーン、夫れは困つたナ、實はお兄上にお目通り致して、少しお御話し申したイことがあつて參つたが、御殿へお上りになり圍碁の御相手では急にはお歸りになるまい、又お姉上は御持病で御寢になつて居られるとか、强てお目通り致すは却て御迷惑と存じ、お目通り致すまい、　竹『何んなら一寸申上げても宜う御座います、　源『イヤ〳〵申上るには及ばん、處でのう竹、一寸盃を貸して呉れ、　竹『御酒を召あがるので御座いますか、　源『左様ぢや、持つて參つた此の酒を飲むのである、　竹『貴郎御酒をあがるなら此方のお座敷で召あがつた

ら宜う御座いませう、　源「イヤ此處で宜しひ、臺所の方が宜イ、早く盃を出せ、　竹「ハイ」、とお竹が持て來る、盃取り上げた源藏へ奉公仕ります、明日出立致しますに付き、お別れとして罷り出ました、甚だお口に叶はざる疎酒で御座いますが、一こん獻上いたしまする、手前お酌を致す、イヤ是はお美事、其お盃は源藏頂戴仕る、是はお酌にては恐入ります、　竹「源藏さま、何を貴郎被仰います、ソコには何誰もお在は御座いませんヨ、　源「默れ餘計な事を云ふナ、酒は一人で飲では味がない、ソコデお兄上と飲むやうにして、頂くと一段美味ぢや、サアお兄上今一獻お重ね

下さい、　竹「源藏さま、貴郎お氣が狂つたんで御座いますか、　源「默れ〳〵、一々口を出す夏繩奴ぢや、其方に參つて居れ、時に竹、未だお兄上はお歸りにならぬか、　竹「未だ中々お歸りになりません、　源「夫れは困つたナ、オー日が暮て參つた、然らば拙者は立歸るが、お兄上様がお歸りになつたら源藏罷越たと申上げくれ、　竹「畏りました、　源「夫に此度西國邊のアル諸侯へ御奉公を致すことに取極り、明日出立を致す、夫故今日お別れに參つたが、御不在でお目通り致さず殘念ぢやと申上げくれヨ、　竹「オヤ〳〵貴郎の樣なのんだくれをお抱へなさる、お大名樣が御座いますか、　源「卑しひ言葉を遺ふナ、のんだくれとは何んだ、イヤ惡

く云はれても致し方がない、折節參つてはクダをまき、其方共に迷惑をかける、然し此の以後は迷惑をかけたくもかけることが出來ぬ、能く只今申したことを覺えて居つて、お兄上へ申上げて呉れ、矣れ此の徳利に酒が殘り居るが、是は源藏土産として持參致したものだと、お兄上へ差上げて呉れ、尚ほお姉上へ宜しく申上げて呉れ、其方も機嫌よく勤めろ、市次にも宜しく傳へて呉れ、アー醉つた、醉つた、人生僅か五十年、旭日に向ふ白露か、と謠を唄ひながら蹌踉めく足を踏しめて立出る源藏、竹「源藏さま笠が殘つて居ります、源「イヤ是は憚り、頭に殘つた臺坐の上に載せ、二三歩行き過ぎだが、

フシギ顧眄たる源藏、鹽山の住居を熟と眺め、是が此の世の見納めかと思へば、猛き武士もホロリと落す一滴、人や見ると笑ひにまぎらし、脇坂侯の上屋敷を跡にと爲し、本所尾上町の楠屋源助の宅へ參りました」、

御話替つて六ツの時計がきしる間もなく、若徒市次を連れて立歸る鹽山與左衛門、與「市次大きに御苦勞であつた、市「定めし御寒いことで御座いましたらう、與「イヤ御殿の内は澤山火があるからさして、寒いとも思はぬが、其方は供待に永く控へて居つて

定めし冷たであらう、　與『部屋に歸つて休息を致せ、　市『有難ふ存じます』、玄關へ立出た御新造おまき並に下女の竹、　まき『大層御悠りで御座いました、　與『イヤ碁の相手は思ひの外時刻を過すもので、意外に遲くなつた、　まき『サア此方へ御出遊ばせ、火桶に暖め置たを衣類を出す、夫れを着かへて、與左衛門が、御新造の酌出した茶を一杯喫して、　與『不在中に誰も見へぬか、まき『アノ源藏さまが御出になりました、　○『アー源藏が參つたか、御前會たか、　まき『イエ妾は持病が起りましたので御目にかゝりませんでした、竹が御會申したそうで御座います、　與『左樣か、竹お前源藏に會たさうだが、何か傳言でもあつたか、　竹『アノ西國邊

のお大名に御奉公するに就て、お暇乞に上つたと被仰いました、　與『何に奉公致す、　竹『ハイ、明日御出立ださうで、夫れは可笑いちやア御座いませんか、貧乏德利とか申す穢イお德利へお酒を入れて、お持になりました、旦那さまが御不在だと申上げたら、夫れは殘念だと被仰つて一人言を云ひながら、御酒を飲つてお歸りになりました、　與『ウーン、然うか、何う云ふ服裝を致し居つた、赤合羽に饅頭笠、ウン左樣か、まさ御前會なんだナ、まき『病氣で御座いました爲に御目にかゝりません、　與『病氣と申すが、見受けた處左したることでもない樣だ、一寸會てやつたら宜つたらう、源藏も私に會たいと云つて參つて、私に會ことともならず、

お前にまで會ずに立歸つたは定めし殘念であつたらう、斯樣なことを申すと男らしくない、甚だ女々しきことゝ笑ふか知らんが、私の爲の弟ならば、御前の爲にも弟だらう、夫れはアノ通りナ不身持で、定めしお前も今迄迷惑を致したこともあるだらうが、明日出立を致すと云ふことだから一寸會てやつて、彼の口上を聞き僅少なりとも餞別を致し遣はしたなら、定めし喜びしことゝ思ふが、イヤ是は私の愚痴ぢや、不具な子ほど可愛が親の情、放蕩無賴の弟だけ猶更私は不憫がます、とんだ愚痴を申した、　まき『恐き入りました、』　與『何にも詫るには及はぬ、　まき『御酒を召あがりますか、　與『左樣源藏の持て參つた酒でも飲かナ、取寄せた例

の酒一二杯飲たが、何んとなく心持が惡ひ、床を延べさせ枕に就しが、偖て睡られぬ、睡られのは最も千萬、現在血を分けた弟が今宵は吉良家へ討入つて、亡君の仇を報ぜんと舊戟突戰、虫が知らずか幾度も與左衛門が寢返りをして、夜の明るを待て居る內に八ツ半今にも七ツと思ふ頃、勞れたまゝにトロ〳〵と睡つた、

フシ『俄に窓下を駈けゆく足音喧しく、ガバと起上つた與左衛門、見れば降りつゞく雪も今日は歇み、久かたぶりに窓へさし込む旭日かげ』、

窓から往來を見ると消へ殘る雪を蹴立つて駈行く人々、　與『夫れ

へ參るお方に一寸お尋ね申すが、失火でも御座るか、侍『イヤ淺野の浪士が五十人ばかり、昨夜吉良邸へ押かけ、少將殿の首級をあげ、泉岳寺へ引揚る途中仙臺侯のお辻に止められて、アレに居るとのこと、末代迄の武士の龜鑑と存じ、是より罷越して一見致すので御座る、御免、

フシ『馳せ行く後ろ姿を見送りし與左衛門、寢着の儘に玄關へ立出て』、

與『市次は居らぬか、市『旦那さま大變で御座います、與『イヤ只今一寸承はつたが、其方仙臺侯お屋敷へ參つて、淺野浪士を見て參れ、アー云ふ不心得な源藏であるから、其中には居るまい

か、萬一居つたら……イヤ夫れは此方の愛顧目ぢや、兎も角も往つて見て參れ、市『畏りましたと、忠僕市次、雪を蹴上げて駈來る仙臺侯の屋敷、黑山の樣ナ人、○『押しちやア叶ねエ、押ちやア、今や屋敷内へ入つて休息をして居ると云ふことだ、間もなく出て來るだらう、然う押しちやア叶ねエ』、ワイ〳〵云つて居ります、途端に門が開いた、○『イヤー出て來た〳〵、何うでエ立派なものだナ、皆な襟に名が書てあるせ、大層なもんぢやアねエか、市『少々〳〵御免下さい、何うぞ先へ出して見せて頂きたいもので、手前の主人の身よりの者が此の内に……、○『入つて居るかイ、市『其程は能く判りませんが、○『オイ〳〵瞞着して前へ

出ちやア叶ねエ、市次は人を分けて前へ出た、松平陸奥守綱村侯のお情けによつて、同妙寺の粥を頂き厚意を謝して立出し赤穂浪士四十六人、隊伍を亂さず泉岳寺を指して行く、此内に源藏が居るかと、見廻す市次、中村勘介と並んで、シヅ〳〵と夫へ參つた一人は、地黑の半纏段々山道の袖印、鍔頭巾を頂き、襟には細紐を以てさげたる呼子の笛、白山足袋に秋山草鞋を穿き、昨夜吉良邸にて和久半太夫を切りすてたる際、額に受けた疵、白の鉢卷に血をにじませ、夫れへ來つたは赤垣源藏、是を眺めた市次が、

市『源藏さまー——、』源『オー市次か、能く是へ參つた、』市『源藏さま、大層なことを爲さいました』、ホロ〳〵と落す涙、源『市次

能く是へ參つて呉れた、昨夜吉良邸へ乘り込み武士らしき働きを致し、又上野介殿の首級を頂戴し、是より泉岳寺へ引揚げ、公儀の御沙汰を相待源藏、最早今世に於て其方に會ふことは今日限りお兄上並にお姉上へも宜しく傳へて呉れ、昨日罷越したる際御目通り致さぬが殘念であつたと能く申してくれヨ、夫れに是にあるは赤穂の醫師寺井玄達が調劑致した、癪の大妙藥、是はお姉上へ又此の合印はお兄上へ、遺物として贈り呉れ、且肌附の金子、最早不用のものであるによつて、其方並に竹に取らする、市『有難ふ存じます、是をお聞きになりましたらば、旦那さまが何レ程お喜びなさるか、源『市次、其方も追々老年に相成り、永く勤めも

成り兼るであらう、此の源藏世にあらば其方の老後の面倒は見て遣はすが、何を申すも今日のしぎ、お兄上へ能く仕へて一生塩山の家に居れヨ、イヤ名殘りはつきぬ、

フシ『時遲れては同志の者に笑はれん、免せ、と言葉を跡に身は先に、一散に馳せ行く源藏』、

市次は品々を携へ立歸る塩山の玄關、待設けたる與左衛門、容子如何にと尋れば、

フシ『涙と共に物語り、取出した遺物の品々手に取る鹽山並におまき、何んと云ふべき言葉もな

く、暫し熱涙を流し居つたが、斯ては果じと氣を取り直し、衣類を改め與左衛門、泉岳寺に參つて餘所ながら源藏に別を告る』、

此事脇坂淡路守樣のお耳に入り、塩山を召して源藏の容子をお尋ねになり、剰へ彼が持參爲したる例の德利を御寶藏へしめ置れて忠臣の德利であると諸侯方へ自慢に見せる、物變り星うつり、文化の頃太田直次郎南畝先生、狂歌にては蜀山人と云ふ、此の方が脇坂家へ參つて德利を見、夫れを納められた箱の蓋へ、

德利の口から夫れと云はねども

むかし思へば涙こぼるゝ

と認めました

フシ『末代盡せぬ忠義の美名、赤垣源藏重賢の傳先は是にて止める次第なり』、

前原伊助之傳

東家愛樂口演

フシ「雲に聳ゆる富士山も登れば何ごか越ざらめ空をいたせる大海も渡らば遂に渡るべし、

今回は義士銘々傳の内前原伊助宗房の履歴を伺ひます、此の伊助は内匠頭長矩公在世中は、御金奉行を勤めて居りまして、十石三人扶持を頂戴致して居りました、伊助は淺野家の譜代の家來では御座いません、新參御抱へになつたので御座いまして、伊助の生れは江州坂田郡前原村の漁師の伊兵衛と云ふ者の子で御座いまして、二十四歳の時に同村に圓通寺と云ふ寺院が御座います、此寺の門前に毎夜妖怪が出ると云ふことが村中の評判で御座います、中々伊助は度胸の宜ひ男で、村の人が妖怪の出る爲に何の位ゐ迷惑をして居るか知れません、一ッ村中の人に成り代り妖怪を爲と思吳れんと、竹槍を持て夜の九ッ頃ほひ、圓通寺の大門へ來り待

受けて居りますと、一人の坊主が風呂敷包を持て出て參りました
から、八ツ頃地内から坊主が出て來る筈がない、恐く妖怪に違ひ
ないと、一と突に突出した、キャッと云ふ聲と共に倒れる、
『しめた』と倒れた坊主を見ると右の肋から左りへ突貫た、
能々夫を見ると、全く妖怪では御座いません、圓通寺の所化の淨
心と云ふ者で御座いました、妖怪と間違へて淨心を殺した爲に、
驚ひて直ぐ家へ歸り、親父の伊兵衛に是れ〳〵斯う云ふ譯で、妖
怪と間違へて所化の淨心を殺した、例令過ちでも人を殺して見れ
ば、下手人は免れない、何うか繩をかけて夜が明けたら郡奉行の
手へ訴へて呉れろ、と親父は是を聞て、父「何ぼ何でも血肉を分

けたお前へ繩をかけて公儀の御役人方へ召連れ訴へは到底も出來
ない、夜の明けない内に速に此處を立たら宜らう、江戸へでも往
つて二年でも三年でも辛抱をして、餘炎のさめた時分に歸つて歸
らば何うかなるだらう、親父の伊兵衛は五貫六百の錢を出して呉
れましたから、親の情で伊助は江戸表へ五貫六百の錢を持て出て
參りました、馬喰町の美濃屋吉兵衛の家に宿を取りました、江戸
へ來て見ると見る物聞くものが實に珍しふ御座います、遠國の人
は江戸と背中は生涯見られまいと云つて居りました位ゐ、伊助は
珍らしいにより、毎日〳〵今日は淺草、或は上野、芝增上寺其他
各所を見物して居りました、今日も今日とて恰度日本橋の大通り

へ參りました、右側に黒山の様に人が集つて居りまする故、

伊「何んだらう」、とッカ〳〵と伊助は大勢の後ろへ立て見て驚ひた、繪双紙屋の店、　伊「アー大層なものだナ、俺が村に居た時分に、庄家さんが江戸へ往つて來て、江戸の土産だと買て來て見せて呉れたが、大層澤山並で居るナ、何うも是りやア五枚續きだ、是りやア七枚續きだ、是りやア戰さだナ、強さうだナ、オー馬の足の下にちッかつて居るか、嘸ぞ痛かんべエ、オー隨分おッ死で居るナ、幾人おッ死で居るだらう、オー一人二人三人四人五人、アー隨分死でるナ、」伊助と同じ様に見て居りました人が驚ひた、

○「オヤ〳〵妙な奴が後ろに居やアがるナ、此奴は氣狂ひかしら

氣狂ひとすると危險エ」、黒山の様に伊助の前に立て居りました人々は氣味が悪ひから、他所へ除いてしまひました、伊助は喜で前へ出ました、　伊「イヤー何うも強さうだナ、何うでエ黒い馬に乘て兜を冠ねエで、鐵棒を持て居る、オヤ此方の大將の目から五光が出て居る、豪エ人だナ、是りやア何處の戰さだんべエか、少々御聞き申してエもんで、繪双紙屋の番頭は、　番「何んです、

伊「此處に馬に乘つて鐵棒を持て居るのは何んと云ふ人だネ、此方の目から五光をさして居る豪エ人の様だが、全體是りやア何處の戰さだネ」、繪双紙屋の番頭は妙ナ顔をして、　番「アー其鐵の棒を持て馬に乘つて居る人はネ、オイ其戰さはネ何處の繪だか當た

ら七枚續きの繪だが、お前さんに遣るヨ、　伊『何んだネ、何處の戰さだか當つたら私に呉れるッて、是エ一番考えなくッちやアなんねエ、只だッて云ふと、何にが安いと云つて無賃位エ安いものは無エぞ、待てヨ、是れ一ッ當なくッちやアなんねエ』、目を皿の樣にして七枚續きの繪双紙を見つめて居りましたが、隅の方に天正十一年四月、江州賤ケ嶽の戰ひ、佐久間玄蕃頭信盛、秀吉の旗本へ乘り込むと書て御座います、　伊『イヤー俺が處の國の是りやア戰さだ、手を延すと七枚續きの賤ケ嶽の繪を取て丸めて左りの手へ持ました、　伊『何うも、有難ふ御座エます、　番『何んだイ、有難ひと云ふのは、　伊『デモお前樣が何處の戰さか、當たらお前

に遣ると云つたから、私は當ただア、コリヤア私の國の江州賤ケ嶽の戰エだ、佐久間樣が太閤樣の旗本へ暴れ込む所だ、何うでエ夫れに違エなかんべエ、當だから私貰つて往くだ、左樣なら、

番『オイ〳〵今の狎戯を云つたのだ』、と頻りに呼んだが、伊助は耳にも入れずドン〳〵駈け往きました、此時伊助の傍に居りました、四十二三の小肥滿にふとつた男が、　○『ノー勘治、人と云ふものは馬鹿には出來ねエナ、繪双紙屋の番頭奴田舍者と思つて馬鹿にした爲に七枚續きの繪を損をしてしまやアがつた、アノ男を呼でやれ、　勘『ヘエオー其處へ往く赤ッ面、赤ッ面待やイ』、赤ッ面〳〵と頻りに後ろで呼で居りますから、伊助は心の内に妙な名

前があればあるものだナ、赤ッ面と云ふ名前があるかしら、處へ飛で參りました、　勘「オイ先刻から呼で居るのに聞へねエか、

伊「ハア、私を呼で居るのかネ、私は赤ッ面と云ふ名前でねエだ伊助と云ふだ、　勘「何と云ふ名前か知れねエから、汝の面を見ると赤エから赤ッ面と云つたんだ、　伊「ハア然うけエ、江戸と云ふ處は顏の色で呼ぶかネ、ナアー黑ッ面、何の用だエ、　勘「黑ッ面だ、馬鹿にするねエ、　伊「だッてお前樣の名前が判らねエからだ俺が赤ッ面ならお前樣は黑エから黑ッ面だ、　○「ャイ勘治、何をグズ〳〵云つて居るんだエ・　勘「だつて親方隨分此の奴郎人を馬鹿にした奴郎ですヨ、　○「何うして、　勘「俺が赤ッ面と云つたら

ネ、黑ッ面何の用だと云ひましたヨ、餘り親方馬鹿にするぢやア御座いませんか、　○「夫は勘治、汝が赤ッ面と云ふから當然だ、他人樣を呼ふのに氣を附ろ、若しお前さんは何處に居るんだイ、私はネ神田の三河町で人入稼業をして居る龜屋忠兵衛と云ふ者だがネ、　伊「ハア然うかイ、私は馬喰町の美濃屋と云ふ旅籠屋に泊つて居るのでがす、　忠「お前さんは江戸の人ぢやアないネ、

伊「ハイ、私は江戸ぢやア御座いません、　忠「生は何處だイ、

伊「江州でがす、　忠「江州だ、　勘「親方此奴郎泥棒ですせ、

忠「何故だ、　「何故だッて近江泥棒と云ひます、　伊「勘治汝は夫れだから困るんだ、ネー、若し此奴は口が惡ひんだからネ、此

奴の云ふことは氣に止ずに居て下さい、お前さんは江戸へ何しに來たんだイ、〻伊『私は何處へ奉公に入るべエと思つて來だヨ、

忠『町方奉公か夫れとも屋敷奉公でも爲やうと云ふのかイ、

伊『何でも構ひません、忠『夫れぢやア斯うしやう、明日でも私の處へお出ヨ、お前さんの向さうな處へはめて遣るから、伊『何うも有難ふ御座エます、忠『宜ひかネ、神田の三河町龜屋忠兵衛と云ふのだヨ、伊『ハア判りやした、忠『ぢやア明日お出なさい

伊助は喜んで龜屋忠兵衛に別れて美濃屋方へ戻りました、翌日早〻支度をして神田三河町の龜屋忠兵衛と聞て參りますと、直ぐ知れました、伊『御免下せエまし、○『オー何だイ、伊『龜屋忠兵

衛と云ふ家は此方かネ、○『龜屋忠兵衛は家だヨ、お前さん何處から來なすつたイ、伊『私は馬喰町から來た江州の伊助と云ふもので御座エます、忠兵衛居るなら案内して下せエ、○『オー待て居ねエ、親方大變な奴が來ましたヨ、忠『大變な奴とは何だ、

○『龜屋忠兵衛と云ふのは此方かと云ひました、忠『宜ひぢやアねエか、俺は龜屋忠兵衛だから、○『デモ親方餘り大柄な奴ぢやア御座いませんか、忠『此方へ上げろ、○『オー此方へ上んナ、

忠『能く知れたナ、伊『ヤアー昨日は御世話樣で御座いました、何處でも構はねエから何うか御願ひ申します、忠『マア直ぐと云ふ譯にもゆくめエから、二三日の内には口があるだらうから、夫

迄二階へ往つて、マアロがあるまでころがツて居ねエ、　伊「何うも有難ふ御座います、伊助は龜屋忠兵衛の家に厄介になり、何分よろしく願ひます、　忠兵衛の世話で諸方へ參りましたが、何う云ふものですか些とも辛抱を爲ません、僅の内に三十五軒も主人を替ました、是には忠兵衛も弱つてしまい、見かけによらない男だと呆れて居りましたが、時しも極月の二十八日になりました、モー二十五日には行くものは行くもので出入りが極りましたが、中々伊助だけは何處へも極りません、恰度四ツ半頃、　○「今日は」　忠「オヤ是りやア割頭ですかエ、　○「龜屋劇がしいだらうナ、　忠「何うも割頭、二十五日迄の繁忙さと云ふものは一と通りぢや

ア御座いません、漸々此の二三日樂が出來る樣になりました、　○「オー、時に龜屋、他事ぢやアねエがの、水汲仲間が急に今朝暇を呉れろと云つて來たもんだから、仕方がねエ暇をやッたんだが、此の押つまつて暇を遣ると云ふのも出來ねエが、當人の親父の大病だと云ふのだから、暇を遣つたんだが、直ぐ水汲仲間を寄來しちやア呉れめエか、　忠「夫は割頭困つたネ、モー悉皆人が極つてしまつたんで、　○「何んとか一ッ工風をして呉ねエか、何んな者でも宜ひから、　忠「宜ふ御座います、ぢやア何處か聞合して廻しますから、　○「夫れぢやア頼むヨ、左樣なら」、と往つてしまいました、　伊「親方今のは何んの口だネ、　忠「今のは水汲の口だ

伊『何處だネ、　忠『築地の輕子橋に御屋敷のある淺野様だ、

伊『ヘエー淺野、大名旗本かネ、　忠『大名だ、播州の赤穗で五萬三千石だ、　伊『ヘエー五萬三千石、淺野何と云ふのだネ、　忠『内匠頭長矩と云ふ殿様だ、　伊『氣に叶たねエ、私行ふ、　忠『馬鹿を云ふねエ、水汲仲間と來た節にやア、是から寒さに向つて生柔しい者に勤るものか、　伊『何に私勤めます、他人のすること遣れねエことはねエだ、兎に角私を遣つて下せエ、夫では人の出來るまで間に合せに行つて居るが宜らうと、早速に支度をした龜屋忠兵衛は、

フシ『神田三河町の己れの家を跡にして、　龜屋忠

兵衛は伊助を引連れ、築地鐵砲州の播州赤穗郡苅屋の城主五萬三千石、淺野内匠頭長矩公の御通用門へどかゝり、三番の御長家の割頭藤助の許へご參りました』、

萬事を頼んで忠兵衛は戻りました、今迄伊助は何處へ往つても辛抱が出來ませんのを、淺野家三番の御長家へ水汲仲間に住み込で珍しくも辛抱をして居りました、昨日今日と思ひしに、モー是れ四月餘りになり、伊助は今日も擔ひに水を入れ、御長家の勝手に水を汲込み、空擔ひをかついで二番の御長家へかゝつて參ります

と、劇しく聞ゆる氣合、エイ、ヤッ、バタリ、伊「ハアー槍の道場だナ、武者窓へつかまつて覗ひて居りましたが、伊「成程是りやア面白い、槍の道場だナ、オヤ突るのを突ずに居るぞ、モー一と息突出すと旨くつけるのに、是りやア駄目だ、アレ又突損じた雜作ねエのに何うして突ねエのだらう、○「中村待て、中「何だ小林、小「何うも先刻から頻りに藝のことをべラ〳〵諜話て居る奴があると思つたが、彼處に覗ひて居る奴だ、餘計なことを云ふもんだから遣り損じたのだ、何れ位い吾々が稽古の邪魔になるか知れない、引張り込で小ッ甚く突伏てやらうぢやアないか、

○「夫は面白い」、若侍二三人玄關から廻つて來たのを、伊助は

氣が付かず夢中になつて覗ひて居りました、○「是れ〳〵最前から頻りに要らざることをべラ〳〵諜舌て居るのは貴樣だナ、他で見て居る樣にゆくか、諺に他目八目と云ふ位ゐだ、サア此方へ入れ、○「何うも有難ふ存じます」、若侍は伊助を道場へ引入れ、

○「サア何れでも好な槍を持て」、片脇にあつた九尺柄の槍を取り伊「サア御願ひ申します、○「コレ參れよ」、ピタリと付た、伊助は石突から二尺ばかり離れた處を團子掴みにし、妙な腰つきをして、伊「ソラゆくぞ、宜ひかネ、○「口を利な、伊「ホラッ」、と突出した槍、體を變す間もあらばこそ、小林軍十郎は仰向に倒れ入り代り立代り七八人出ましたが、一人として伊助に及ぶ者は御

座いません、

『フシ』御話かわつて當道場の主人、寶藏院流槍術の指南役を勤めまする、吉田忠左衛門先生は公用を濟して御戻りになり、玄關の方へ立止り『、

○『御歸り、御歸り』、と小者が頻りに布令を申入れて居りましたが、

『フシ』此方は試合に夢中になつて、先生の御歸りと云ふことが少しも耳に入りません。忠左衛門先生は其儘居間にと御入りになり、衣類を着替

やうと致しまするこ、劇しく聞へる氣合、ハテ聞き慣ぬ氣合かな、町道場と事違ひ、如何なる人が來りしかと、道場の入口の唐紙を細目に開き樣子如何にと脉むれば、水汲仲間の印物を身に纏ひ、手拭取て向鉢巻、師範代を勤めて居りまする、山室金太夫の向ふに廻り、異樣な姿で身搆へ居り、是を眺めた忠左衛門先生は『、

忠『是ヨ、と先生の聲がしたから、一同は夫へ何れも挨拶を致しました、伊助は見ると一同の人達が御辭儀をして居りますから、

アー吉田先生が御歸りになつた　忠「コレ〳〵其方は何と云ふ者だ　伊「ハイ、伊助と云ふもんです、」忠「水汲みぢやの　伊「左樣で御座います、　忠「其方は誰に從て槍を學だ　伊「ハエ別に槍抔は稽古は爲ません　忠「改めて忠左衛門が敎へ遣はす　伊「何うも有難ふ存じまして、何うか御稽古を願ひます、然らばと忠左衛門は九尺柄のタンポ附の槍を持て伊助の向ふに廻り、　伊「先生ゆきますぞ、ホラ」と突出した、ヒラリ忠左衛門は體を變し、伊助の槍先は流れて羽目板を突た、迚も私は敵ひません、　忠「コレ水汲、然し其方の槍の持方は變つて居るナ、搆へは變つて居るが繰出しの劇しいのには實に感心した、何うして覺へたのだ、別に師

匠を取つて學んだ樣には思はれないが、　伊「ハイ私やア國に居た時分に、私の村に流れの早い川が御座いまして、竹の先へ針をつけてハヤを突て居りました、先刻窓の處で見て居りましたら、雜作なく突るのを此處に居る旦那方が突ねェから、私は一人言を云つて居りますと、敎へて遣るから入れと云ひますから、入りまして遣つて見ると雜作もなく突ました、若侍一同も驚ひた、人を馬鬼にした奴があるもの、吾々をハヤを突つもりでやつたのだ、

忠「コレ伊助、其方は武術が好か、　伊「大好で御座います、

忠「御當家は如何に身分のない者でも、氏系圖を論せず、一藝一能に秀でたる者は直ちに士分に御執立になると云ふのは御家風で

あるから、其方も暇を見て拙者の道場へ呉れば敎へて遣はすから

伊『何うも有難ふ御座います、夫れぢやア明日から伺ひますから何うか宜しく御願ひ申します』、是れから伊助は毎日々々忠左衛門先生の道場へ槍の稽古を受に參ります、

フシ『上根と下根と好ど比ぶれば、好こそ物の巧妙なりけり、諺に洩ず一心不亂に相成りまして、十年一月の如き思ひを爲し、修行を致して居りましたが、月日に關守なく、光陰は矢よりも早く、茲に三年になりました』、

三年目には寶藏院流の槍術は免許に近づいた腕前になりました、時しも元祿の四年正月二日になりました、今日は一日休みで御座いますから、部屋で獨酌で酒を飲で居りました、五ツ頃、○『オイ伊助居るか、伊『何誰で、○『オー俺だ、伊『オヤ割頭ですか御芽出度ふ存じます、頭『實は伊助、今俺は心配してたんだ、高木の旦那が青山穩田の屋敷へ御使者に行んだが、皆な出拂つてしまつて、此り通り雨模様をして居るから、殊によると降かも知れねエ、合羽籠を荷いて往く者がねエのだが、御前御苦勞だが往つちやア呉れめエか、伊『割頭槍持は誰ですエ、頭『俺だ、伊『ぢやア割頭私に槍を持してくんねエか、伊『御前が槍を持て

誰が合羽籠を荷いて往んだイ、　壁「だッて割頭私や年に三兩の給金を貰つて居るのは、水で貰つて居るんで、今日は役違ェちやねェか、何うか槍を持して呉んねェ、　頭「ちやァ伊助、斯うしろ此の屋敷を出るのに俺が合羽籠を荷いて御前に槍を持して出ると云ふ譯にゆかねェから、若し他の部屋の者にでも見られたら外聞が惡ひから、土地を離れたら御前に槍を持せてやらう、　伊「宜ふ御座います、　頭「ちやァ伊助頼むせ」、割頭藤助は歸りました、伊助は早速支度をして、高木良左衛門殿の宅へ參りました、良左衛門殿は今日は青山穩田の松平左京太夫樣の御屋敷へ御使者の役で往く爲に、最も立派な支度をして、

フシ」後の騒動は少しも知らず、黑毛の駒に富士山形の鞍置て打跨り、船底形の鐙を踏ばり、槍を立させ輕子橋の邸も、是が今世の見納めになると云ふのは夢にも知らず、駒を急がせ乘り込んで參りました、青山百人町へと差しかゝり、其頃ほひに江戸三十六道場の取締、眞影流の達人にて、三好運平の爲に高木良左衛門は不禮討になりました、然るに伊助は一日たりとも御供をする上からは、主人なりやわか其儘捨置んと、

吉田忠左衛門先生より仕込の腕を現すは此時なり、一ツには高木の怨みを晴して呉れんと、三好運平、杉山大右衛門、市橋茂三郎右三人を錆槍にて突殺し、其功により淺野家へ士分に執立られる出世の一條は、後編を以て委しく演じます」、

不破數右衛門正種之傳

妻川小勇口演

フシ、笑へば兒女も懷しめ、怒らば獅子も恐らしめ、茲に說出す一節は、赤穗美談が譽の義士と題される、四十七士の其内でさる者ありと聞へたる、武藝にかけては天下の名人と云はれたる、不破數右衛門正種の經歷談を講じます」、

此數右衛門正種は淺野侯に仕へ、食祿百石を賜はりまして、濱邊普請奉行を勤めて居りましたが、一刀流の劍法の名人で御座いまして、据物切を得意として居ります、此の人は殺伐を好む人で、己れが云ひ出したことは必ず跡へは引かぬと云ふ氣性で御座いま

す、後に主君の仇を討つ時には、隨分苦心をした人ですが、何うも氣性が荒く、江戸表在勤を致し井上和泉守眞改の一刀を求めてより爾來、一層氣が荒々しくなりまして、赤穗へ戻り御上の御用で常陸の笠間へ參りました、一月計りかゝつて赤穗へ戻り、

數『是ヨ、只今戻つた、　○『ヘイ是りやア旦那さま御歸りなさいまし、　數『金助、不在中は骨折だッたナ、大分貴樣は窶れて居る樣だが、工合でも惡かつたのか、　金『イヱ別に身體は惡くは御座いません、　數『夫れなら宜ひが顏色が餘り惡いもんだから、實は工合が惡いと思つて心配をして居たのだ、數右衛門は座敷へ入り旅の勞れを拔うと云ふので、其日は毎時より早く臥床ました、夜

の彼是九ッ頃ほひになると、ウーンと云ふ呻吟聲が聞へる、數右衛門は目を覺し、　數『金助、何うした大分うなされる樣だナ、　金『ヘヱー何うも旦那、此の七日ばかりは毎晩の樣に寢るとうなされますので御座います、　數『大分身體が勞れて居るからだ、胸へ手を載せて寢るとうなされると云ふ話を聞て居るから、餘り種〳〵人のことを考へずに寢た方が宜イ、　金『ヘヱー、旦那樣御寢みなさいまし、其儘寢てしまひました、其内に夜が明て數右衛門は井上眞改の一刀の鞘を拂ひ、　數『切味は充分だらうが、何うか一番何か試して見たイものだ』、と思ひ、犬を切たり或は竹束を切つたりしては眞の切味を試す譯に叶ん、　數『金助、　金『ヘヱー、

數「其方にナ折入つて頼みたいことがあるが、聞ては呉れまいか

金「何んです旦那、　數「聞て呉れるか何うだ、　金「夫りやア旦那の言葉は何んな事でも、俺の出來ることなら厭だとは云ひません

數「然うか、頼みと云ふのは他でもないが、此の一刀の切味を試す爲め、貴樣の一命を貰ひたイ、　金「旦那冗談云つちやア叶ません、他のことゝ違つて命を上げる譯にはゆきません、再び此の世の中に生れて出て來ることが出來ないんです、　數「夫は困つたナ痛くない樣に切るんだが他所にないかナ、　金「ぢやア旦那、松原通りへ行くと乞食が澤山居りますから、乞食は生て居てもつまらないから、死んでしまつた方が宜ひと云ふのが幾人も御座います

數「夫は宜ひことを敎へて呉れた、氣狂ひに刄物を渡す樣なもの

數右衛門は喜で日の暮るのを待て居りましたが、其内に日が暮れ得たり賢しと、

フシ「充分の支度に及び、井上和泉字の一刀を帶し、濱小路の屋敷を跡にとなし、松原通りへと指しかゝり」、

雪駄の音が聞へますから蒲鋒小屋の内に居りました一人の乞食が

乞「旦那樣御手許は御面倒さまですが、御覽の通りの不具で御座います、何うぞ御惠を願ひます、　數「是れ乞食、其方は何方が惡

いのだ、　乞『五年以前から足腰の自由が利ない爲に、何うすることも出來ません、　數『何に五年前から腰が拔て居る、夫は困るだらうナ、何うたゾンナ苦しひ思ひをして居る位ゐなら、一層死んでしまつた方かましたらう、　乞『死にたイ〳〵と思つて居りますが、未だごうが滅しませんものですから、死にきれないので御座います、　數『何うだ一ッ痛くない樣に一と思ひに殺してやらうか　乞『エー殺された方がましで御座います、　數『然らば貴樣の命は貰つたと』、柄に手をかけ拔んとするのを見て乞食は驚き、　『人殺しと一目散にと逃げだしたり、

數右衛門は驚ひた、腰が拔て居ると云ふ乞食が立て逃ると云ふ騒

ぎ、おまけに普通の人より逃げ方が早イ、　數『コレ〳〵逃げるに及ばん、待て』、と聲をかけたが、待ば命にかゝはる大事だから、ウ〳〵逃げてしまひました、　數『コレ乞食命の惜くない奴が居るなら是へ出ろ誰も出て參りません、數右衛門はスゴ〳〵己れが家へ歸り、　數『金助、只今戻つた、　金『旦那樣御歸りなさいまし、何うしました、　數『貴樣の樣に僞りを云ふ奴はないナ、腰が拔けて居ると云ふ乞食が駈出した、　金『夫は旦那樣、世の中に生あるものが命がいらなイと云ふ人はありません、逃るのが當然で御座います、　數『何うかして切りたい』、と其儘御寢みになりました、其夜も又九ッ頃ほひになると、ウーンと呻吟始めた、　數『金助、

金「へエ、　數「能く貴樣は毎晩うなされるな、　金「何うも旦那樣私は壽命がダン〳〵縮みます、　數「何うして、　金「實は旦那、斯う云ふ譯なんで、旦那樣が笠間に御出になつて、二十日ばかり經まして私が町の風呂へ參りました、スルと梅の湯に小間物屋の作兵衛が居りまして、作兵衛さん暫く御前さんに會なかつたが、何うしたんだと聞くと、二月ばかり病つて居たと云ふので、夫れから私が病氣と云ふのは餘り若い女房を有て居るから、病氣になるんだらうと脊中をポンと叩くと、其儘ウンと作兵衛さんは倒れてしまつた、夫れッきり死んでしまつたので、其時に私が打ッたから死んだのだッて私は御目附の處へ引揚げられましたけれども

く卒中で死んだので、夫れから毎晩寢ると作兵衛さんが枕元へ出て來て、御前さんが私を殺したんだと云つて化て來るんです、其が爲に睡られません、　數「何にそんな世の中に馬鹿々々しいことがあるか、以來作兵衛が貴樣の處へ化て出ない樣に身共がしてやるから起ろ、　金「へエー、何うするんです、　數「サア早く支度をしろ、　數「何をするんです支度と云ふのは、　數「物置へ往つて鍬を持て來イ、作兵衛の埋つて居る菩提所を知つて居るだらう、　金「へエ、城下の柳町の雲光寺で御座います、　數「ヨシ、然らば是から雲光寺へ參り、作兵衛が化て來ない樣に云つて聞せてやらうと、物置から一挺の鍬を持て參り、數右衛門正種は井上眞改の

一刀を帶し、是から雲光寺へ參り、作兵衛の死胴を試して呉れんと金助を案内として、

『フシ』後の災ひは少しも知らず、雲光寺へと參りまして、來つて見れば刻限過、其の爲に表門を堅く閉してあります故、裏手の方へと廻りました、

竹の矢來を打破り、ズッと墓所へ入りました、數『金助、何れが作兵衛の墓だ、金『彼處にある墓で御座います、數『ヨシ、と新しい石塔のあるのを夫を取り除け、臺石も取り除け、金『サア金

助、此處を掘れ、金『旦那樣何うするんです、數『以來作兵衛の出て來ない樣に有難ひ御經を聞してやるから、金『左樣で御座いますか』、と是から掘り始めた、やう〳〵蓋が見へる樣になり、數『モー夫れで宜しひ』、數右衛門は小刀の鞘を拂ひ、蓋にかけてある繩を切り、蓋を取り除け見ると、新佛で御座いますから、三角の切を眉間にあてがい、兩手を合して手には珠數をかけてあり數右衛門は兩手を延して、グイと作兵衛の死骸を抱き上げ、片脇の處へ置き、數『サア金助、有難い御經を作兵衛に授けてやるから能く見て置け、姫路皮の襷を取て十字に綾なし、手拭を疊で鉢卷に爲し、井上眞改の大刀の鞘を拂ひ、金『是れ作兵衛其方は病

の爲に死したるのを何故か罪も怨みもなイ金助の處へ毎夜の如くに來る由であるが、以來は來てはならんぞ、浮ぶ樣にしてやるから安心をして往く所へ往け」、エイ、ヤッと眞向より切り下した一刀、据物切の名人、作兵衛は頭のてッぺんから腮にかけて割りつけられ、生て居るんならキャッとかスーとか云ふのですが、死んで居るから何んとも云はない、血も流れません、エイ」とポロリ〳〵切落し、今度は胴試しだと胴へ切り付け、寸斷に作兵衛の死骸を切り刻み、數「サア金助是で宜ひゾ、金「旦那樣大變なことをしましたナ、數「然し金助決して他言をしてはならんぞ、金「宜しふ御座います」切り刻んだ死骸は棺の中へ是を投り込み

バラ〳〵となつて居るから世話は御座いません、蓋をして上へ土をかけ、石碑を上へ載せ是で大丈夫と安心をして、數右衛門は金助を連れて我家へ戻りました、

フシ「御話變つて雲光寺の墓掃除の久助は例時の通ご高箒を手に持まして、墓塲を彼方此方ご掃除を致しまして、フト見ますこコハソも如何に城下本町の小間物屋作兵衛の石碑の廻りに土が堀返してあり、只事ならじご近づき見れば」、

コハ如何に、臺石と石碑の向が違つて居ります、昨日までは斯う

云ふことがなかつたが、是は不思議と四邊を見まするとと、腕が一本夫に顚倒て居ります、驚ひて雲光寺の和尚に告げました、住持が來て見ると此の體裁、打すて置く譯に參りませんから、早速係りの御役人へ御届けに及びました、村松喜兵衛と云ふ方が二三人を連れて來て立會の上で石碑を除き見ると、コハ如何に作兵衛の死骸はメチヤ〳〵になつて居ります、何者の所業だらう恐くは作兵衛に怨み意恨のある者の所業ではない、餘程腕前のすぐれて居る者が試しにかけたに相違ない、何か證據がと四邊を見ると、鍬が夫れに御座います、其鍬を見ると不破と燒印が捺して御座います、衆中で不破と云へば、數右衛門は古今の腕前、殊に井上眞改

の一刀を求めてより、常に切味を試したいと云ふことが耳に入つて居りますから、早速此の鍬を證據品として取り上げ、其處を引揚ました、一方は小間物屋作兵衛の身寄の者を呼出し、調べて見ると全く意恨を含まれる樣な人はないと申しました故、一方は不破の仲間金助が始終うなされて居るのを聞て、夫れが爲に數右衛門が一ッには刀試しと面白半分にやつたのだらう、然し死骸を弄そぶと云ふのは輕からざる罪で御座います、早々此の趣を內匠頭長矩公へ申上げ、打捨置譯には參りませんから、長矩公は早々數右衛門をば御呼出しになり、一と通り御尋ねになると、素より正種は僞りを搆へるのが大嫌ひで御座いますから、數「如何にも手

前が作兵衛の死骸を切たに相違御座いませんと、詳に申し述べました、『殿』然らば其方は死罪を申付る、他の者の手を借ずに予が其方の一命を申受るぞ』、と一と間の内へ數右衛門を止め置き、七ツ少々過時分に御庭先へ莚を敷き、其上へ數右衛門を座らせ、長矩公は大刀を取直し、『殿』數右、不愍ぢやが其方の一命は此の一刀で申し受けたぞヨ、此度は其方に似合ぬ事を致したな、『數』最早誰を怨む處も御座いません、手前一朝心の駒の狂ふた爲めに斯樣な亂行を致し、何んとも上に御詫の申さう樣も御座いません、『殿』數右、然らば一命は申受けた』、エイと氣合をかけ、ギラリと鞘を拂ひ、數右衛門の首筋へ、ピシリ、『殿』速に死骸を取片付イ』、

其儘、長矩公は御奥へ成らせられ、夫れへ係りの者三人俵を一俵持て參り、數右衛門を俵の中へ入れる、數右衛門は君の情で斯く一命を取り止め、死しても必ず此の御恩は忘却は仕らず、と心の内にと思ひ、日の暮るのを待て不淨門より小者が二人、數右衛門の入つて居る俵を荷ぎ、一人の役人が附添ひ千鳥ケ濱へ速に捨參れと云ふので、小者と附添の役人は數右衛門が全く御手討になつたものと思ひ、○『オー熊、』『熊』何んだイ、○『何んだぢやアねエ、此の不破と云ふ人は隨分甚ひ人だナ、雲光寺へ往つて小間物屋作兵衛さんを切たんだとヨ、』『熊』嘘を吐け、作兵衛さんは湯屋で死だんぢやアねエか、○(判らねエナ、死骸を切たんだとヨ、

熊『ウン然うか、隨分甚ひことをする人だなア、旦那方も豪エ人が隨分あるが、死んだ者を刀試しにすると云ふのは甚すぎらア、數右衛門は心の内に、愈小者の言葉を聞て骨身に浸み、アー吾ながら如何なれば斯樣な惡戯を爲したらう、と思ひ、俵の中だからだん〳〵繩が身體へ喰ひ込で參りました、痛くてならないが身動きする事も出來ず、○『サア此處だ旦那此の邊で宜ふ御座いませう、役人『其處らで宜らう』と浪打際へ置き、○『此處へ置きやア大概浪の爲に諜はれて往つてしまうから』、とソコデ三人は退きました、數右衛門は三人の姿が見へなくなつた爲に、やう〳〵俵の中よりも這出し、四邊の樣子を見ると誰も居りません、今浪打

際を離れやうとする際、○『アイヤ數右衛門、數右衛門』と、呼ぶ聲、誰も居ないと思ひましたが、フト顧眄つて見ると、何時の間にやら黑頭巾で面を包み兩刀を帶し、○『數衛、數『何誰で御座います、○『内藏ぢや、數『是は御家老樣で御座いますか、面目次第も御座いません、内『數衛、如何なれば其方此度は心得違ひを致した上格別の御情けを持ち、其方の一命を助け、是は主君より其方へ下さる物ぢや、是は内藏の寸志、速に受けて呉れイ』と云はれた時に

フシ『厚き君の御惠みこと情けにほだされて、胸も一パイになりて、泣うとすれど涙も出ず叫うこ

しても聲も出ず、暫時の間茫然たり』、

内『如何に數衛、當所を速に去り何れへ參つても居所の定り次第我許まで知らせ吳イ、何れ其内歸參の叶ふ時節もあらう、速に立去れと、大石内藏助殿は其處を立退きました、

フシ『後ろ姿を伏し拜み、今迄は君に仕へし身の上なれど、永の御暇出た上は、是より江戸表に參り、御主君御先祖代々の菩提を吊ひ、萬分が一の御恩返しど』、

江戸表へと參りまして、淺野家代々の菩提所愛宕下青松寺へと參り、毎日墓掃除を致して居りましたが、後に内藏助殿が青松寺へ墓參の砌、墓所が充分に掃除が行屆ひて居ります故、寺男に尋ねて見ますと、男『何れの御方かは存じませんが、毎日是へ參り掃除を致しては御歸りになります、立派な御武家様で御座います、如何なる人ならんと、内藏助殿は待受けて居ります、所へ參りましたのが數右衛門正種で御座います、内藏助殿は數右衛門の志を感じ、一度永の御暇になつた正種も、内藏助殿の計ひにて、舊主に歸參が叶ひました、間もなく元祿十四年三月の十四日、殿中の間違ひ、數右衛門は義黨の中に加はり、御主君の御恩報じは此時なりと、一年十ケ月の苦心を爲し、其志を遂たと云ふ、數右

衛門正種の御話も此の邊で御免を蒙ります』、

大石南部坂雪の別れ

小島亭德三郎口演

『時は元綠十五年十二月の十四日、天に白龍の蟠るが如く、地に白狐の走るに似たり、降來る雪の其中を霜降置紗の合羽を纏ひ、二段彈きの紺蛇の目の傘を持ち、紹色の大小を横へて、最とも凜々しき姿にて來かゝる武士は、是れぞ

淺野家柱石の臣たる大石内藏助良雄なり』、

當日高輪萬松山泉岳寺に於て、月はかはれど日は同じ、亡君の御命日で御座います、左れば内藏之助を始めとして四十六名の人々は亡君の御霊前で評議を致し、今宵こそは松坂町の吉良邸に討入り、亡君の鬱忿を晴さんと、彌々評議も纏まり、同志の面々に畫の内に知己の者があれば、速に今の内に別を告げて來る樣にと、集る場所は兩國矢ノ倉の堀部彌兵衛の許へ來る樣にと傳へて置き泉岳寺を引拂ひました、内藏助殿は赤坂南部坂に屋敷の御座いまする、淺野土佐守殿方へ參り、瑤泉院樣に別を告げやうと思ひ、内匠頭長矩公の奥方は淺野土佐守殿の姫君で御座いまして、淺野

家斷絶となり、實家が淺野土佐守で御座いますから是に引取られて居りますから、左れば内藏助は瑤泉院様にお別れを告げんと一子主税良金並に寺坂吉右衞門を供に連れ、石町の浪宅を出て雪の中を恰度今溜池へかゝりますと、

フシ『向ふの方より黑木綿の打ツ碎羽織、朱鞘の大小をぶち込みまして、髪を大たぶさにと取りあげ、左りの手には大黑傘を携へて一杯機嫌と見へまして、右によろ〳〵左りによろ〳〵、碎眼矇朧ごして血鳥足、是ぞ越後家再興の大忠臣

關根彌次郎義遠なり』。

内藏助の姿を見るより、義『其處へ參る犬侍暫く待て、イヤサ淺野家の手飼の犬待て』、と大聲で怒鳴りたてましたから、内藏助殿は先を急ぐ身ゆへ、面倒と思ひましたから知らぬ振をして行き過やうとすると、義『待てと云ふのに待んか、其方は啞か聾か』、と云ひヅカ〳〵と内藏助の前へ立止りました、内『何か御用ですか、義『用があるから呼び止たのだ、内『何に御用で御座いますか先を少々急ぎます故、義『用と云ふのは貴様に少し云つて聞せる事がある、汝の主人長矩公は殿中の刄傷より家名改易となり、然るに貴様は長年の間主人の恩を受けながら、此處赤穗城離散にな

り、必ず共に亡君の怨みを晴すと心得しに、左はなくして都山科に居た頃ほひにはさん〳〵遊女藝妓にうつゝをぬかし、更に主君の志を繼がず、お金配當を致したのを軍用金と名をつけ、主君の貯への金を横領爲し、湯水の如くに撒散し、侍にあるまじき所業を致し、其方は犬だナ、イヤサ犬侍、拙者は汝の樣な犬に言葉をかける身分ではないが、能聞け神田鍛倉河岸に道場を開いて居る關根彌次郎と云ふ者だ、云はれて殘念とあらば速に眞劍の勝負を致さう、大侍、是でも汝は勝負が出來んか、何んとか云へ、是を聞た寺坂吉右衛門は大石殿になりかはり、相手を致してくれんと思ひ、顏色變て前へ出やうとしたのを、内藏助殿は目で知らせ

義『何んとか云へ、

フシ『熟ど堪へた内藏助、大事の前の小事ぢやぞ、此處は堪へなきやならないぞ』ど、

内『何うぞお免しを願ひます、手前の樣な小膽者に何んで主人の仇討を遂げられませう、何うか此場はお免しを願ひます、義『然らば其方は犬だナ、犬ならワンと云へ、コレワンと云はんか、四ツばいになつて、ワンと云へ、内藏助も事面倒と思ひ、ワンと一聲あげました、義『よし、夫れなら免してやる、早く犬行け』、と内藏助の横面へ青啖をかけました、

フシ『堪忍の袋を常に首にかけ、破れたら縫へ破

れたら縫へ、此處が我慢の爲ごころご關根彌次郎義遠の後ろ姿を見送りつゝ』、

内藏助は主税吉右衛門を連れ南部坂の淺野土佐守殿の屋敷へ訪れました、早速此趣を瑤泉院様へ告げました、内藏助は一室へ通りました、處へ出て參りましたのは瑤泉院様のお附老女の戸田の局で御座います、

局『是は〳〵御家老様には能こそのお出で御座います、毎時お變りも御座いませんで、お芽出度ふ存じます、

内『イヤ是は貴女こそお變りもなく、

局『主税様にも御元服遊ばしたと云ふ事を聞き及びましたが、恐悦を申上げます、御家老様には疾より江戸表へ御出府遊ばしたと云ふ事は聞て居りましたが

此の雪の中をば能こそ御出で御座います、就まして伺ひますが兄の十内は矢張り江戸表へ來て居りませうか、

内『イヤ十内は誠に器用な男で、京都の祇音町で幇間を致して居る、

局『何んで御座いますか、兄が幇間を致して居るのですか、何んと云ふ情けない事で御座いませう、武士の家に生れながら主家が斷絶になり、幇間になるとは餘りと云へば兄の心は情のふ御座います、弟幸右衛門は當時何れに居りませうか、

内『オー幸右衛門は、彼は伏見で戸八の指南をして居る、

局『オヤモー兄弟のお話は聞き度は御座いません、堀部様は何をしてお在でせう、

内『安兵衛か、

局『左様です、

内『安兵衛はの、八百屋をして居る、戸田の局も是を聞

て二の句が出ません、稍あつて、局『何うぞ此方へ御通りを願ひます』良雄は主税と同道で奥の一室へ通り待受けて居りますと、

フシ『正面の襖をさツと押し開けば未だ失せやらぬ花の香の、緑艶ます黒髪を半ばの處より切り拂い、紫縮緬の被布おばお召になりまして、白綸子の襟を出し、右手には水晶の念珠をつまぐりお立出にこなりたるは、是ぞ亡君の奥方瑤泉院様なり』、

内藏助は兩手を支て頭を下げ、

内『瑤泉院様には毎時お變りも是

れなく恐悦を申上げます、瑤『オー内藏助、暫くであつたの、能こそ此處は東都へ下向を致したの、明暮其方の事を思はぬ日とては只の一日もなかつた、主税も元服を致した由、自らも嬉しく思ふぞや、内『コハ有難き仰せを蒙り千萬御禮を申上げます、

瑤『就きまして内藏、早速に尋ねるが其方が江戸表へ參りしより一日として是まで自らの許へ訪れず、今日降る雪の中をも厭はず參つたのは、敵討の日も定まつた故、暇を告げに參つたのであらう、何時仇討を致すのか速に聞して、自らを喜ばしてくれます樣

フシ『流石女大夫ご云はれた瑤泉院様も堪へがたきご見へまして思はずお質ねにこなりました』、

良雄も此の時は返答に弱つてしまい、「實は今日參つたるは夫れとなくお別れを致さうと云ふつもりで參りましたのを、瑤泉院様のお尋ねに俄に人拂ひをして申上げる譯にもゆかず、只默然として兩手を膝につき、瑤「コレ内藏、早う聞してくれイ、内「是はしたり、意外なるお尋ねに預り良雄迷惑致します、手前も永くの間都山科に居り、故あつて今度當地へ參りましたが、田舍育ちの事故江戸住居は物かしまじく、是より山科へ立戻る心組にて實は其お暇乞に參りました次第、然るに亡君の怨みを晴す日は定まりしかとのお尋ね、實に手前困却仕り、最も赤穗城を離散の際には其志も御座りましたが、同意の人も數ありしなれど、日に

月に變心を致す者數多く、迚も亡君の怨を晴すと云ふ譯には參りません、殊に吉良殿は出羽米澤の上杉家が縁者なれば瘦浪人が五人や十人苦心を致した處で、望みを達すべき謂れが御座いません依て亡君には恐れ多い事なれど、二君に仕へぬを以てお詫を致します、只今の樣なお尋は御無用に願ひます、瑤「内藏、其方の申すのは一應最もな樣に聞へますが、女の事故大事を告げてはならんと同志の者と堅く約束は爲て居るであらうが、何うぞ聞じてくれい、内「再三のお尋ねなれど、身に覺えの是れなき事は誓て申上げる事ならず、殊に御主君は御場所柄をも辨へず、吉良へ刃傷を致され、是れ御短慮より起りし事、一時の怒りにふれ刃傷した

其爲に吾々一同の者、流浪の身になつたのは皆主君の短慮より起りし事なり、刃傷の前夜大高源吾、神崎與五郎主君へ再三御意見を申上げたる由、其時は承知をして居ながら、如何に不禮あればとて、上野殿へ刃傷を爲さるとは笑ふに堪へた致し方、吉良もも う老る年故吾々一同が苦心をせずとも五十路を越して居り、今に死するも判らん位ゐ、若し吾々が主の仇を討んとして遣り損じた る時は、夫れこそ諸藩の物笑ひの種となり、亡君の耻辱を再び明るみへ出す樣なもので、決して仇討抔を致す樣とは毛頭所存は是れなく、是時瑤泉院樣は膝を前にお進めになり、瑤『内藏、能う聞きませイ、愛宕下の田村邸に於て切腹の節、片岡源吾右衛門に

申付くれ、大學殿へも何んの御遺條もなく、自らへもお言葉もなく、只内藏其方へのみ呉々と申のこさた、其上ならずお肉どほしの短刀までも其方が拜領致して居りながら、今日になり只今の言葉は自らを欺かうとして申したのであらう、内『是はしたり、重なるお尋ね毛頭其志は御座いません、瑤『内藏、何うあつても仇討の心底はないか』、と

フシ、瑤泉院樣は立上り、佛間供へて御座ひました冷光院殿の位牌を取るより早く良雄の前へさ差出したり』、

瑤『サア冷光院殿へ對し申し譯があるか、何うぢや、挨拶をせい

内『例へば冷光院殿様の位牌の前でも別に申上げ様も御座らん、最前よりも申上げました通り、殿の御短慮より手前も千五百石の祿を失ひ、今日の様な憂艱難を見るのも是皆亡君の爲す業』、と内藏助高調子に笑ひ、瑤泉院様も内藏助の言葉を聞て只呆れはて、居りまして、

瑤『主税や、其方は殿様の御籠愛淺からず、依つて殿様の仇を討うと云ふ志があるだらうの、

主『奥方のお言葉では御座いますが、手前も元服致したと云ふ様なもの、未だ部屋住の身分で御座る、何事も手前の心には任されません、

内『能う申した主税、夫れでこそ我が一子の主税だ、

瑤『己れ、して見れば

汝等親子は同意を致して居るものと見へる、斯ばかりの不忠者とは主君も思召さず、お肉どほしの短刀や辭世をお認め短冊までよもやお遣はしにはなるまじものを、見下げはてたる畜生武士、速かに立て、と』

フシ『此時女心の一と筋に思いつめたる胸の内持病の癪氣がさし起り位牌を片手に持たる儘、其場へ動こ打倒れ、夫れと見るより戸田の局はお後よりも、驚きながら傍へ寄り』、

早くも瑤泉院様を抱起し、其他お附の女中も頻りに御介抱申上げ

て居りました、やう〳〵の事で何分か治り、戸田の局は、局『御家老樣、此の通り御臺樣お苦しみを遊ばすのも皆貴下の爲す業で御座います、只の一言でも宜しふ御座いますから、小聲でなりとも妾に聞して下さい、』内『折角のお頼みぢやが身に覺えのない事は申上げる譯にはゆかん、却つて御臺樣を欺く樣なものだ、左すれば不忠の上にも猶は不忠を重ねる道理、然し吾等が參つた爲に瑤泉院樣には持病の癪氣を引起し、實以て内藏申譯が御座らん、就ては是は都山科に某が居りし際、和歌の會を催し其時に詠だ腰折歌、或は都名所を隙のあるまゝに、拙者が認めた品で御座る別に土産物も御座らんにより何うぞ是を上へ差上げやうと思ひし

折から、持病のお病氣を起され持歸る譯にもゆかず、何うか是は其方から癪がお治りになつたら奥方へ差上げて頂きたい、』局『左樣で御座いますか、奥方樣が御受取になるか、お納めにならんか其邊は判りませんが、兎に角お預り申して置きませう、』内『然しの、畜生武士の内藏より差出したものは納めぬと仰せになつても其方が手許へ置てくれ、先を急ぐにより是にて御免を蒙る』、と内藏助は立上り、サア主税參れよと玄關をさして參りました、土佐守殿の御門を潛り内藏助良雄は、

フシ『四邊の樣子を見まはして、折よく劇しき雪の降る爲に往來途絶て人影だにも更に見へず、

大石親子は土佐守殿の門の地幅の處へ兩手を挾き、心にもなき惡口雜言致したは定めし不忠者よと思召も御座いませうが、若も大事を打明けた其時は、是迄の艱難辛苦も水の泡、千日の苅た茅も只一塵の灰となり、聞してくれと云ふのをば、聞かさぬ譯は此の道理、お免しなされて下されと」

内藏助は再三再四頭を下げ、何時まで斯くてあるべきぞと、やう〳〵心を取り直し兩國の矢ノ倉を指して參りました、お話は變り

まして、瑤泉院樣の御持病はやう〳〵の事でお治りになりました戸田のお局は傍についてお世話を致して居りましたが、四ッ頃ほひになり、お暇を願ひ老女部屋へ歸りました、見ると紅梅と云ふお附の女中が頻りに居睡りをして居りましたが、襖が開た音に驚ひて目をさまし、

「旦那さま、お勤め御苦勞で御座います、

「紅梅や、刻限もモー遲し殊に寒さも一層强く雪も大分積つて來た樣だから、モー休んでも差支はない、

「ハイ有難ふ存じます、今日は旦那さまは大層お下りがおくれまして御座いますネ、何誰かお奥へお客さまで御座いましたか、

「アノ御城代大石樣に御子息とお二人で御機嫌伺ひにお出になり、夫れが爲に後れま

したヨ、　紅『御家老様で御座いますか、　局『オヤ能お前は御家老様と云ふのを知つて居るネ、　紅『ハイ聞き及んで居ります、御器量人と云ふお話ですが、お立派なお方ですか、　局『紅梅や、殿様が世にお在になる時は器量人と云ふのを聞て居たが、器量人處ではない今日は只モー呆れて物が云へない、アレハ犬侍だヨ、

紅『何うしてアノ犬侍で御座います、　局『實は紅梅や、斯う云ふ譯なのだヨ、夫が爲に奥方様が持病のお癪が起つたのだヨ、

紅『オヤ左様で御座いますか、奥方の御病氣はお治りになりましたか、　局『やう〳〵の事でお治りになり、お寢み遊ばした、サア紅梅や、明日は早いから引取て早くお寢み、　紅『お寢みなさいま

し、戸田の局のお附の女中紅梅は其處を退きました、戸田のお局は其儘横になりました、寢やうとしても今宵に限り何うしても睡れません、睡につかないのは無理は御座いません、

フシ『血肉を分けた兄弟が、降り來る雪を冒して、君の怨みを晴さんと、吉良邸にこ乱入爲し多くの者を相手こし、此處を先途こ切り結ぶ最中なり、眠やうこしても眠もやらず、虫が知らすかお局は、只うつ〳〵こ致して居り』、

夜は深々こ更渡り、木茅も睡る丑みつの頃ほひとなりました、何

者ども知れずスーと襖を音せぬ樣に開けまして入つて來る者が御座います、お局は細目にあき見ると、お附の紅梅で御座います、何をするのかと睡たふりをして見て居りますと、箪笥の抽出へも手をかけず、金土棚へも手をかけず、四邊を頻りに見廻して居りましたが、軈て床の間に置て御座いました、畳間大石殿より瑤泉院樣へお土産だと云つて置て參りました、紫縮緬の帛包を手に取りソッと出て行うとしたから、己れ待て』紅梅の後ろからむんづとばかり引組だり、此の戸田の局は柔術の免許の腕で御座いますから何んなく紅梅を捻伏せました、紅『旦那さま、心得違ひを致しましたから何うか御勘辨を願ひます、お免しを願ひます、

局『是れ紅梅、勘辨をしてくれい、免してくれとでは、免しません、何う云ふ譯でお前は此の帛包を持てゆかうとしました、速かに夫れを白狀をすればよし、左なくば免す事は出來まんぞ、

紅『實は旦那さま、一と通り聞て下さい、妾位の世の中に不幸の者は御座いません、母親に早く別れ、父の手一つで育てられましたが、父が永の病ひの爲め何うする事も出來ませんでしたが、やう〳〵昨年病氣全快を致しまして、夫が爲に御當家さまへ緣あつて參りましたが又先月より父が病の床に就さまして、手許が不如意になり、再三父の許よりお金を送つてくれいと云ふ手紙で御座いますから、惡い事とは承知の上で斯樣な事を致しました、何う

かお免しを願ひます、局『紅梅、何故お前は左様に偽りを云ふのだ、お金が慾いなら今夜に限らず何時なりとも此の部屋へ來て、お金のある處をお前が承知をして居ながら、お金戸棚へも手をかけず、畳間大石殿が置てゆかれた此の品へ心をかけるとは、何か仔細があるのだらう、何うしてもお前が云はなければ、斯うだヨ」、と手を逆に捻り上げ用意の細繩を取出し、高手小手に縛め、

局『サア是でもお前は云はないかエ、サア何うだい、お前は確に誰かに頼まれて是を持てゆかうとしたのだらう、サア何うだ」、さん〳〵責折檻を致し、紅梅も我慢が出來なくなつたと見へ、

紅『何うぞ旦那免して下さい、申上げます、妾は神田の鍛冶町の

刀屋藤兵衛の娘で御座いますが、父が平素御愛顧を蒙つて居りまする上杉様の御家來千坂兵部様が父の許へ參り、父に頼みました故ソコデ妾が御當家へ御奉公に參り、若し播州赤穂の淺野様の御家來が來たならば、何なりとも傍を離れず聞きとつた上知らして呉れイと頼まれ夫が爲に今晩斯様な事を致しました、始めて聞た戸田の局は由々しき大事だ、と

フシ」繩つきの紅梅を其處を引立て、殿居の者を呼起し、之々と事の次第を詳に語り、帛を開いて中を見れば、吃驚致し四十有餘人の連判狀、

是を携へ瑤泉院様へ、お目通りを願ひ出で、然う斯うする内に夜が明け離れ、寺阪吉右衛門が討入の顚末を知らせに參り、瑤泉院様の前に仇討の物語を致すは後編」、

横川勘平宗則の傳

妻川小勇口演

フシ「日の本に千筋の道はあるなれど、今踏む道がますら夫の道、君父の仇は俱に天を頂かず、

武士は己れを知るもの、爲に命をすて、婦人は己れを愛する人の爲形を裝ふ」、

横川勘平宗則のお話を一席辨じます、勘平宗則は江戸表へ參り、愛宕下に其頃屋敷の御座ひました、森對馬守殿の御留守居役を勤めて居りました、芹澤助右衛門と云ふ人が御座ひます、此助右衛門の妻は勘平の爲には血肉を分けた伯母で御座ひまして、其縁故で赤穗離散になりまして江戸へ參り、助右衛門の許に世話なつて居りました、助右衛門は永くの間連れ添つて居る夫婦の仲に子供が御座ひません、銀金黃金も玉も何にかせん、子にまさる寶なしと云ふ、夫れも常に芹澤夫婦は年を老て、子供がないので歎ひて

居りました、幸ひ勘平が參りました故、或日芹澤夫婦は相談を致し、助『おのぶ、何にしてお前と斯うやつて永くの間一緒になつて居るが、何うも子供が出來ぬ、此先迚も子供の出來る筈はない何うだらう一ツ勘平を養子に致した方が宜らうと思ふが、のぶ『眞實に妾も然う思つて居りますので、妾の身寄で御座いますから、妾の方から云ひ出しにくふ御座ひまして、助『夫は決して云ひ出しにくひことはない、のぶ『デワ何うか然う云ふ工風になるならば、爲て頂き度ものですと相談が出來、助『コレ勘平、勘『伯父さん何んの御用で、助『他事ではないがナ、今いろ〳〵相談をしたのだ、吾等もモー是れ五十を越て居るし、伯母も、モー五十

路に近づいて居る、是から先子供の出來る筈はない、よしんば出來た處で遲ひのだ、其子にかゝると云ふ譯にもゆくまい、何うだらう一ツお前が私の養子になり、吾々夫婦の死水を取つて貰ひたいと思ふが、何うだらう、勘『ハイ、他の事とは違ひまして、篤と考えた上で御挨拶を致します、のぶ『勘平や、何もお前が篤と考へた上で、挨拶をすると云ふのだが何も考へる處はないぢやアないか、お前が淺野樣へ仕へて居る時から見ると、家の養子になれば二百石をつげるのぢやアないか、お前が是から新規に他家へ主取をすると云つても、二百石と云ふ祿は夢にも見る事が出來ないヨ、本來なればお前が喜で、何うも有難ふ御座ひます、何うか

然う云ふ工合に是非お願ひ申しますと云ふのが、當然ぢやアないか、夫れにお前が家の養子になつて呉れゝば、妾が何の位ゐ嬉しひか知れないぢやアないか、

助『アーコレ〳〵のぶ、然うお前の樣に八釜敷云つても仕方がない、他の事と違つて養子縁組と云ふものは容易のものぢやアない、篤と考へて挨拶をすると云ふのは當然だ、拙者の方も手輕に挨拶をされては却て張合がない、兎に角勘平能く考へた上で挨拶をしろ、

勘『夫では相濟ませんが、一寸何うぞ御猶豫を願ひますと、勘平は己れの居間へ入り、是は一と思案をめぐらさなければならないと、

フシ『勘平は心の内に思ふ樣、赤穗城を離散の時、

大石殿と堅く約束致してより、亡君の修羅の妄修を晴さん爲め、江戸表に出府爲し時の來るを待受けて、時こそ來れば吉良の屋敷へ討入爲し、上野介の首級をば討取りて、亡君の無念を晴す夫迄は、誓て二君に仕ゆる心はなく思ふ折から伯父伯母よりの養子の縁組、コリヤ何うしたらよからうと』、

勘平宗則は一ト間の内で腕拱ひて思案をめぐらし、是は迚も自分の淺智惠では叶んと、石町の太夫殿の力を借んと思ひ、伯父の處

へ參り、勘『伯父上、一寸往つて參りますから、勘『勘平何處へ行くのだ、勘『麻布まで往て參ります、勘『左樣か、成るべく早く歸つて來るやうに、勘『往つて參ります』、其愛宕下の森家の邸を出て、石町の鐘突堂新道、太夫の許へ參り、早速に訪れまして奥へ通り、内『オー是は横川、暫く見へんであつたナ、内『何うも太夫御無沙汰を致しました、内『何うした横川大分顔色が惡いが、勘『偖て太夫、容易ならざることが出來をしました、内『何んだ横川、容易ならさる事とは、勘『實は伯父夫婦がカク〳〵而々、手前に養子になれと勸めました、内『夫れは横川誠に御身の爲には喜ばしい譯ではないか、勘『是はお情けない太夫のお言葉

何が手前の身に取りまして喜ばしい事で御座いませう、實は伯父の家に養子になる位ゐなら、手前も今日まで苦勞は致しません、又此方へ相談にも參りませんで、飽迄も初志を貫かうと云ふ考へで御座います、何んとか養子縁組を破談にする手段は御座いませんか、内『夫はの横川、物は纏めるのは骨が折るが、破毀と云ふのは別は六ケ敷事はない、勘『何うしたらば破談になりませう、内『夫は横川、貴公が餘り人間が堅すぎるから、其の堅ひ處を見込で伯父が養子に爲やうと云ふのだらう、何かお身は道樂がないか、勘『左樣です、別に道樂と云ふものは御座いません、内『酒を飲かエ、勘『酒は一滴も飲みません、内『夫れぢやア斯うした

ら宜らう、是から酒でも飲で少し亂暴をしたら、直ちに破談になるだらう、　勘『成程夫は名案で御座います、然れば是でお暇を致します』、と鐘突堂新道の内藏助の浪宅を出て、恰度芝口まで參りました、プンと臭いがしたのは酒の匂ひ、右側を見ると酒めしとしてある、　勘『コレだ、此處で一番飲で醉て歸らう、免せヨ、

○『ヘエー入らつしやいまし、何うぞ此方へお上んなすつて、

勘『左樣か、御免』、と大刀を右手に持ち、三疊敷てある處へ座り込み、　○『エー旦那さま何が宜しふ御座いませう、出來る物は葱鮪、蛤鍋、あんこうで御座います、　勘『是れ酒を呉れろ、　○『ヘエーお酒は一合で御座いませうか、　勘『一合で宜ひ、　○『エーお

肴は何んに致しませう、　勘『其處にあるは豆腐の樣だナ、　○『豆腐で御座います、エー夫れぢやア湯豆腐に致しませうか、　勘『湯豆腐にしてくれろ、程なく酒を一合に湯豆腐を持て參りました、

勘『コレ〳〵此の酒を皆な飲だら醉かナ、　○『旦那さま、御冗談仰有つちやア困ります、醉ない酒は御座いません、　勘『ぢやア醉のだナ、　○『けれども旦那さま、一升飲でお醉にならない方も御座います、一合でも醉方も御座います、　勘『然らば是だけ飲だら醉て亂暴が出來るかナ、亭主は驚いて醉て亂暴なぞをされちやア堪らない、勘平は猪口に一杯酌で口の處へ持てくると、ツンと胸をつき返しさうで、　勘『是は何うも甚い匂ひだ、迚も目をあいて

飲ないから、目をつぶつてグイ呑に飲だ、又一杯飲だ、サア心持が惡くなつて來た、斯う云ふものを人が飲でドコが宜ひのだらう跡は飲切れませんから、　勘『是れ勘定は幾何だ、　○『エー御酒が一本、　湯豆腐で二十四文で御座います、　勘『左樣か、釣は要んぞ、何うだ醉たかナ、　○『夫は何うも私には判りません、

勘『イヤ大きに馳走になつた』、と表へ出ると、サア苦しくなつて胸の動氣は高くなるし、心持は惡くなつて、

フシ『右によろ〳〵左によろ〳〵、蹌踉ながら漸々の思ひで、愛宕下の森さまの御通用門にさかゝりました』、

己れが家に戻り、苦しくなつて堪りませんから、蒲團を延て今休うとする處へ、　のぶ『オヤ勘平お歸りかエ、　勘『伯母さま只今歸りました、　のぶ『オヤ勘平や、お前大變顏色が赤イぢやアないかお酒を飲で來たネ、　勘『如何にも御酒を飲で參りました、のぶ『何んてエ事だらうネ、勘平お前今肝甚な處ぢやアないか、アーやつて折角伯父さんが、お前を子にしやうと云ふ處を、好なお酒でも嫌ひな風をして居るのが當然ぢやアないか、　勘『實は伯母さん、飲まないと思ひましたが朋友の處へ參り御馳走になりました、

のぶ『早くお前醉でも醒さなくては叶ないヨ、　勘『勘平戻つたか一寸是へ參れ、　のぶ『勘平やお前早く顏でも洗つて、お酒を飲で

居ない風をしなければ叶ないヨ、勘平は顔を水で洗つて、　勘「伯父さん何か御用で、　助「大分宜ひ機嫌だナ、　勘「ヘエー少々頂いて參りました、　助「勘平少しはお前酒が飲るのか、　勘「大好で御座います、　助「夫りやア何より話せるな、何の位ゐ飲るナ、

勘「左樣、一升位ゐは飲ませう、　助「夫は感心だ、實はお前を養子にするに就き、私も心配をして居たのは、留守居役と云ふものは、何うも交際で酒が飲なくては困ると思つて居た、一升飲る口なら一ッ勘平始めやうか、勘平は驚ひて、猪口で二抔でさへ苦んで居るのに、迚も伯父さんの相手にはなれない、　勘「伯父さん御免下さい、　助「何處へ往くんだ、　勘「一寸忘れて參りましたから

參りますので、　助「然うか、早く戻つて來イ」、勘平は石町の太夫の處へ參りまして、　勘「實はトウ〳〵遣り損じました、　内「夫は我等にも氣が附なかつて、では斯うしろ、遊里通ひは何うだ、

勘「遊里通ひは未だ一遍も爲た事が御座いません、　内「デハ遊里通ひを始めたら宜らう、恰度宜ひ處だ、勝田が來て居るから、新左衛門横川を吉原へ連れ出して、充分に遊ばして呉れ、新左衛門喜んだ、一如何にも手前引受けました、横川貴公の樣な堅い人はないヨ、是から行けば制限も宜ひから出懸けやう、　勘「夫れでは宜くお願ひ申します、然らば太夫往つて參ります」、女郎買に行くに斷つて行く人は勘平位ゐなもので御座います、勝田に連れられて

勘平は、

フシ『石町の鐘突堂新道の浪宅を跡にして、アレより淺草御見附を潜りまして、天王橋より雷門へとかゝりました』、

新『横川是が雷門、向ふに見へるのが淺草寺觀世音、本體が一寸八分で黄金で出來て居て、門番が丈餘の仁王だ、此の通りか馬道と云ふのだ、元馬の市が立たと云ふので、馬市と云ひ、夫が今馬道だ、此所が田町だ、此處が土手だ、是が八丁と云ふが、此處は八丁はない、是から大門まで三丁半しかないけれども、通ひ慣たる土手三丁半とは云へないから、通ひなれたる土手八丁と云ふの

だ、ソラ此の坂が衣紋坂と云ふのだ、勘『ハ、ア左様ですか、

新『能く横川覺えて居なくチヤア叶ない、是が見かへり柳、昔は女郎が此處まで客を送り出したと云ふので、お客が此處に女郎が居る爲に、見かへり〳〵往つたと云ふので見かへり柳、是が大門だ、勘『成程、新『ノー横川吉原の七不思議と云ふのを知つて居るか、勘『ヘエー七不思議とはなんです、新『大門あれども玄關はなし、川岸と云つても舟つかず遣り手と云つても、取るばかり、是等が七不思議の内だ勘『ウン成程、恐れ入りました、委しく御存知で、新『横川感心しちやア困るヨ、此處が仲の町だ、是を五十軒ど云ふのだ、勘『一軒、二軒、三軒、四軒、新『何を勘定し

て居るんだ、勘『五十軒と云ふんだから、新『馬鹿な事を爲ちやア叶ない、五十軒と云つても然う別に極つては居ない、何うだイ隨分賑かだらう、新左衛門に引連れられて勘平は諸方を廻り、

新『サア上らう、勘『何うぞ御免を蒙ります、新『何故、勘『迚も手前には女郎屋へは上れません、新『だツて横川此處まで來てひやかして歸つては馬鹿々々しいぢやアないか、勘『デモ何うも手前には上られません、新『ぢやア横川仕方がないから歸らう、

勘『何うか然う云ふ樣にお願ひ申します、新『横川、ぢやア女郎買をした風をして、今夜は石町へ泊り明日の朝歸つたら宜らう、明日歸つて伯父が何處へ往つたと聞たら、吉原へ遊びに往つたと

云へ、勘『成程、新『何處へ上つたと聞たら、半藏松葉へ上つたと云つたら宜らう、勘『一寸お待を願ひます、覺へ切れませんから、と懷中から紙を出して、勘『サアお話を願ひます、新『判つたかイ、松葉屋半藏だヨ、是を俗に半藏松葉と云ふのだ、茶屋は何處から往つたと聞たら、桐半から送られたと云へ、桐屋半兵衛と云ふから宜ひかイ、何んと云ふ女を買たと云つたら、東雲と云ふのを買たと云へ、藝者を呼だかと聞たらお照にお半と云ふ二人を呼だと云つて、祝儀は何の位ゐ遣つたと云つたら、一兩の惣花と答へた方が宜ひ、夫れから、勝田の相方はと、聞たら紫と云はなきやア叶ない、書かヱ、勘『書ました、新『夫れぢやア戻らう

と其晩は大石の宅へ泊り、翌日四ッ半頃ほひになり、愛宕下の芹澤の家へ勘平は戻りました、勘『伯母さん、只今戻りました、昨夜は誠に相濟みませんでした、のぶ『オー勘平、お歸りかエ、何うしたのだイ、眞實にお前には困つてしまつたヨ、昨日アー云ふ話が出たのに、夕べ何處へお出だヨ、勘『實は伯母さん、昨夜は吉原へ遊びに參りました、のぶ『とんでもないぢやアないか、今ネお前肝甚な處ぢやアないか、昨日は昨日でお酒を飲で、又夕べは夕べで吉原へ往つて來たなんて、お前には呆れてしまうヨ、吉原へ往つても他へでも泊つて來たと云ふならまだしもの事、何んぼ何んでも餘りお前は妾を馬鹿におしだヨ、勘『何うも誠に伯母

さん申譯ノ御座いません、勘『オー勘平、夕べ何うした、勘『伯父さん只今、勘『伯父さん只今ではない、何處へ往つた、夕べは勘平面白い處へ往つたナ、マア然しお前は吉原遊びか好か、勘『手前は女郎買が大好で御座います、勘『夫は話せるナ、實はお前を養子にするに付き、餘り道樂がないので困つて居たのだ、處が酒も飲むと云ふし、又女郎買を好だと云ふ、何よりだ、イヨ〳〵家の養子にはもッて來イだ、お前も知つての通り身共は留守居役だ、お留守居は何うしても交際を廣くして置なければならない、隨分交際で遊びに行く事も隨分ある、吉原へ誰と往つた、

勘『勝田殿と参りました、　助『ウン、同藩の勝田新左衛門、夫は面白かつたらうナ、吉原は何處へ上つた、　勘『左様で御座います浅草橋見附から雷門より、田町の土手へ出まして、アノ土手は伯父上の前ですが、三丁半しか御座いません、夫れを通ひなれたる土手八丁と云ふのは通ひなれたる、土手三丁半と云つては云ひにくふ御座いますから、八丁と申します、見返り柳から大門へ入りまして、　助『道を聞くのではないワ、何處へ上つたと云ふのだ、

勘『松葉屋半藏で御座います、俗に半藏松葉と稱へます、　助『松葉屋半藏とは洒落た家だナ、茶屋は何處だ、　勘『桐屋半兵衛、桐半で御座います、桐屋から送られたのか、相手は何ん

と云ふのだ、　勘『左様で御座います、東雲と申します、　助『東雲東雲と云ふのは容貌は美か、　勘『左様食事は能く判りません、

助『食事ぢやアなイ、『おしよくかと云ふのだ、　助『左様で、

助『勝田の相方は、　勘『紫、　助『アー紫か、藝者は何うだッた、

勘『お照にお半です、　助『成程氣の利た者をあげたナ、遊びは何んなだソた、　勘『ヱー、遊んで居りまして、　助『遊びだヨ、

勘『デスから遊んで居りました、　助『祝儀は何んなものだ、

勘『一両の惣花です、　助『夫は氣が利て居るナ、遣り手には幾何遣つた。　勘『ヘヱー。　助『コレ勘平。貴様は懷中を先刻から見て居る様だナ。　勘『コレは。　助『是はちやアない。可怪な物を見て

居るぢやアないか。然し勘平・若い時は二度は無イから今の内どん〳〵遊んで置けと』、勘平は何うしても養子破談が旨く參りません、芹澤夫婦は何うかして勘平を自分の手許へ置きたいと思ひ、女の黒髪には大象をも繋ぎ止ると云ひ。是は勘平に妻を一人迎へさしたら宜らうと、夫れとはなしに町方の出入の八百屋の娘のお玉と云ふのが、容貌が美御座いますから、行儀見習ひの爲と云ふので、芹澤方へ寄來しました、是が勘平に氣に叶ば妻に迎へさせ様と勘平の寢起の世話をさして居りました、

フシ『時しも元祿十五年の極月の十四日、早朝より高輪泉岳寺に同志の方々集り、今宵吉良邸の

夜討の相談を爲し、勘平宗則ほ當日伯父の家を出る事能はず、然う斯うする内日は暮れ、勘平宗則の胸は早鐘を突ばかり是より宗則が遲がけの一番乘を致すと云ふ お話は次回に申し上げまする』、

神崎與五郎則休之傳

小島亭德三郎口演

フシ「世の中に人と生れて來た上は、一度は榮へ

又衰へ、水の流れと人の身は、其源に返るまじぞや」、

義士銘々傳の内神崎與五郎則休の傳を伺ひます、此の與五郎則休は、播州赤穂郡赤穂在、荒川村の生れで御座いまして、幼名與吉實父は百姓で作兵衛と申しまして、與吉が三歳の時に死去致しまして、母親の手一ッで育て上げまして、恰度與吉が十三の時に不圖した風の心持から、假初の床に就きまして、段々病が募つて參りました、與吉は一日も早く母親の病氣全快を神々へ願ひをかけて居りましたが、母親は瞬間に兩眼がバッタリ見へなくなりました、與吉は身頼味方もない處より、誰を頼みにすると云ふ事もな

らず、毎日々々枝川へ參りまして、鯉を釣上げては夫を賣て母親を養つて居りました、

フシ『孝は百功の基ゐ、萬全の司、ウニコーや萬能功の利目より、親孝行は何んにつけても』、

一心になりまして母親を養つて居りましたが、今日も今日とて相變らず枝川鯉へ來り釣をして居りました、スルト郡奉行を勤めて居りますと、神崎與左衛門と云ふ人が御座いまして、此の人が一人の悴に與太郎と云ふのが御座います、此の與太郎は性來の白痴で、不具の子ほど親は可愛ひとか申します、與左衛門夫婦は只た一人の與太郎が白痴で御座いますから、一層不愍が増まして、何

事も當人の爲すが儘に爲して置きました。今日は興太郎が仲間の喜藏と云ふ者を達れて。枝川縁へ來つて釣をして居りましたが。愚かですから少しも釣ません。餌を取られたり針を引ッかけたり一時餘り掉を垂れて居りましたが。少しも釣ません。　興太『些とも喜藏釣ないナ。　喜『何や。　喜『何んです坊ちやん。　興太『些とも喜藏釣ないナ。　喜『何うも坊ちやん。餌ばかり取られた節には駄目ですヨ。中々坊ちやん。釣と云ふものは六ケ敷ものでご御座います』。興太郎がヒヨイと向ふを見ると。興吉は針を入れる度毎に釣上げて居ります。

興太『喜藏や。此處には魚が居ないのだ。アノ向ふの町人の居る處が釣るヨ。彼處に爲やう

喜『然うですナ。彼處が宜ふ御座い

ませう』。喜藏は腹の内に馬鹿な奴があればあるもんだ。物の一丁と離れても居ないに魚が集ると云ふ處があるもんぢやアねエ。釣方が判らねエからだ』。と掉とビクを持て興吉の釣をして居る傍へ參りました。　興太『コレ〳〵町人。其處を除け。此處は俺が釣處だからモツと向ふへ往け。　興吉『然うで御座いますか』。無理を云ふと思つたが。村で評判の郡奉行の紳士興左衛門の悴と云ふのを知つて居りますから。其處を退きまして三十間計り離れた處へ參り又釣を始めました。興太郎は興吉の居た場所で掉を垂れて見たが。矢張り釣ません。興吉の方を見るとチヨイ〳〵釣上げて居りました。　興太『喜藏や。此處は駄目だヨ。町人の居る處へ又魚が

跡を追ひけて往たから。彼處に爲やう。コレ〳〵町人其處除け。此處は俺の釣場所だ。　與吉『畏りました。又其處をどいて二十間ばかり離れた處へ來て棹を下して居りました。與太郎は遣つて見たが何うしても釣ません。　與太『喜藏。是りやア彼處に居るアノ町人が釣をして居ちやア。些とも釣ないから彼奴を追拂つてやらう』。とヅカ〳〵と參りましたが。　與吉『坊ちやん。然う云はずに勘辨を釣を爲ちやアならないぞ。　與太『コレ町人、貴樣は此川でして下さい。私は道樂に釣をして居るのちやア御座いません。阿母あんが永の病ひで何うすることも出來ませんから。毎日此處へ參りまして釣をして。釣上げた御魚を賣て御錢に替て。阿母さん

に御飯や御藥を買て上げるんです、　與太『コレ左樣ことを聞く耳は持て居なイ、歸れと云ふに歸らんか、　與吉『何うか勘辨して下さい、　與太『歸らなきやア斯うだ』、と與吉の三本の棹を膝へかけると、ピシリと折て川へ投げ込み、釣上げた魚はビクの中へ入つて居るのを、ビクを同じく川中へ投込でしまい、與吉は是を見て　與吉『坊ちやん、御情けのう御座ひます、釣棹やビクを川へ棄られてしまつては、明日から阿母さんに御飯を喰させることが出來ません、後生ですから其棹を一本分けて下さイ、　與太『何に棹を呉れろと、貴樣の樣な町人に遣る棹は持ぬ、歸れと云ふのに歸らんか、　與吉『イヱ歸ることは出來ません、後生ですから棹を一本

下さい」、與吉は悲くなり、双眼よりホロりと涙をこぼし、與太「何うか一本下さい、　與吉「己れクドイ奴だ、斯うして呉れるから思ひ知れ」、と腰に帶た一刀の柄に手をかけて、拔うとしたから與吉は驚ひて、

「一目散にと其場の方を駈出したり」、

與太「コレ逃げやうと云つても逃す譯には叶ぬ」、と跡追かけて參りました、過つて與吉は石へ躓ひて倒れすした、與太郎は一刀を引拔き、已れと云ひざま

フシ「打下す太刀の下こそ地獄なり、今や與吉の一命は危く見へたり」、

與吉「若し何うぞ命を御助け下さい、　與太「助けるとはならん」、と今や切り下さうと云ふ場合、モー與吉は迚も斯うなれば免れぬ場合と、早くも傍へにあつた、切石を取るより早く與太郎を望で投げつけたり、切石は與太郎の眉間に中り。キャッと云ひざま與太郎は仰向に倒れました。喜藏は夫へ飛で參りまして。　喜「オーは是は大變なことになつた。坊ちやん。氣を確に御持なさい。坊ちやん」。と耳元へ口を寄せて。劇しく呼で見たが急所と見へて。與太郎の息は絶て居ります、是りやア斯うしては居られんと、喜藏は主人與左衛門の許へ急ひで知らせに參りました與吉は此樣子を見て、　與吉「アーとんでもないことをした、神騎の坊ちやんを殺

す氣はなかつたが、トウ〳〵死んでしまつた、人一人殺して見れば、コーしては居られない、家へ歸つて阿母さんに別を告げて、御奉行樣の御屋敷へ往つて罪を受ねばならない」、と力泣々我家へ歸り、阿母に知れては却て心配をするだらう、然うすれば病ひかゝはる、　與吉「阿母さん、只今歸りました、　母「オー與吉や、御歸りかエ今日は何うだツたイ、　與吉「ハイ澤山釣ました、　母「アー夫は宜つたネ、與吉や今日は餘り風が寒ひから風でも冒てはならないと心配をして居たヨ、　與吉「阿母さん、心を強く有て一日も早く身躰を丈夫にして下さい、夫ればッかりが樂みです、　母「與吉や年の幼ない御前に種々苦勞をかけて濟ないネ、妾の身躰が癒

つたら今迄の御前に苦勞をかけた吃度御禮をするヨ、　與吉「イエ阿母さん、親子で御禮なんと云ふものは要やア爲ないヨ」、目かいの見へない母親は虫が知らすか何んとなく胸騷ぎが致します、

フシ「山は燒ても山鳥は、子に引かされて身を焦す、燒野の雉子夜の鶴、軒に巣をくう小鳥でさへ、親子の情は又格別、現在悴の與吉が人を殺して戻りしこは露知らず」

處へ、　○「オイ阿母アや、與吉は戻つて來たかな、　母「何誰で御座ひます、　○「私だヨ、　母「オヤ源右衛門さんですか、　源「オー

を云つて下さい、　源『阿母ア與吉に限つて惡戯なんぞを爲やアしねエヨ、與吉の親孝行に俺も感心して居る位エだ、サア與吉早く來て呉んナ、　與『阿母さん、一寸往つて參ります』、と心の内に與吉は五人組の源右衛門さんが來た上は、郡奉行の神崎さまから連れに來たに相違ないと、

『是が此の世の別れかと、思へば胸も一パイに、悟られまじと思へども、氣もトボ〳〵と立上り、跨ぐ敷居が死出の山、雨だれ落が三途川ソヨと吹來る其風は無情を誘ふ時の鐘、曲る處

與吉居たか、　與『オヤ伯父さん、何んか御用ですかエ、　源『與吉少し御前に聞きたイことがあるから來のだ、此處ぢやア話が出來ないから一寸表迄出て呉れ、　與『ハイ阿母さん伯父さんと一寸表へ行きますから、身躰を丈夫になつて下さい、　母『何んだネ與吉例時にない御前は大變沈んで居るぢやアないか、何か間違でもしたのかイ、　與『イヽエ、阿母さん間違ひなんぞ爲やア爲ない、ソンナ心配は要ないヨ、　源『オー阿母や、身躰は些とは快かネ、

母『ハイ有難ふ存じます、御影樣で大分快御座います、　源『ノー阿母や何にしろ目が見へねエのは困るの、　母『眞實に目の見へないのは困りますヨ、何うか與吉が惡戯をした時は、遠慮なく小言

が六堂の辻」、

源右衛門に連れられて郡奉行の神崎與左衛門殿の屋敷へ參りました、與左衛門殿は最前より待受けて居りました、源右衛門より早速與左衛門殿へ告げました、夫れ庭へ廻せと、與吉は庭へ廻され莚を一枚敷て其上へ與吉を座らせ、處へ與左衛門殿は大刀を提げ己れ憎ひ小僧、能も我一子與太郎を手にかけて殺したナ、忰與太郎の敵と顔色變り、兩眼は血走り、　與左『コレ小僧、能も其方は我一子與太郎を手にかけて殺したナ、サア其方の一命は我等が此の一刀で申受るから左樣心得ろ、　與吉『ハイ伯父さん、殺す了見でしたのでは御座ひません、坊ちやんが是れ〳〵斯う云ふ譯で、

私を切うとして、其處を逃る爲に石を摘んで投りましたので、當り所が惡くツて死んだので御座ひます、サア何うか私を殺して坊ちやんの怨みを晴して下さい、年は僅か十三才であるが、覺悟したものと見へ兩手を合して、　與左『サア、小僧、モー命は無イぞ何か云ひ置ことがあれば聞届け遣はす、　與吉『能く伯父さん尋ねてくれました、云ひ置ことは別に御座ひませんが、只一ッ私の亡後は御願ひ申します、　與左『何んだ早く云へ、　與吉『實は伯父さん、私は此處で命をすてるのは決して厭ひは致しませんが、阿母さんが永の病ひで、私が今此處で命をすてたら、跡で阿母さんを世話をする人が御へいませんから、何うか阿母さんの身躰を何分

共に御願ひ申します、　與左『ウン』、此時與左衛門は鞘を拂つた一刀を納め、　與左『アー我ながら過つたり、其方の樣なる孝子を手にかけて殺すと云ふ了見が何うして起つたらう、與吉貴樣の命は助けて遣はす、我悴の愚かの爲に起つた今日の事、其方の樣な孝子に向ける刄はない、我ながら過つたり、此上は與吉何うであらう、我は四十六才になり、今與太郎を失ひ、家を襲べき者がないが、其方今日より我子になり、吾々夫婦の面倒を見てくれ、

與吉『伯父さん、夫れでは命を助けてくれますか、何うも有難ふ存じます、此處で與左衛門殿は與吉を座敷へ上げ、早速衣類を着替させ、與吉を同道したる源右衛門を呼び、實はコレ〳〵の次第

故、吾等が是より與吉方へ參り、母親に會ひ、當人を我等の養子に致すにより、速に案内をしろ、此處で郡奉行神崎與左衛門殿は與吉の宅へ參り、母親に面會をして與吉を養子に貰ひ受け、與左衛門殿は與吉の母を引取り、醫者ヨ藥ヨと手當を致しましが、遂に其甲斐もなく與左衛門方で與吉の母おもよは此の世を去りました、與吉は與左衛門の養子となり、名を與五郎と改め、十六才の時に元服して則休と付け、神崎與五郎則休の御話も是で讀終りと致します

大高源吾忠雄之傳

港屋柳帳口演

フシ「嵐山名こそ惜しけれ大高が、眞の風は吹ぬかと、花を散すは鶯ならで大鷹が、鷹の羽風の其爲に散るらん、迚も散るべき花ならば、君が幹なら是非もなし」、

此の大高源吾忠雄は長矩公在世中は、近衆役を勤め、廿石五人扶持を頂戴致して居りましたが、遂に主君は殿中刃傷の爲め、其身

は切腹、家名は改易になりまして、彌々亡君の仇討と事定まり、江戸表へ出府を致しました、同志の中で此の大高源吾は歌道に秀でて居りまして、俳名を子葉と申しまして、時しも元祿の十五年十二月、其身は煤竹賣になりまして、吉良邸の樣子を探つて居りました、恰度十三日の四ッ半少しまはつた時分で御座います、極月の十三日と云ふのに源吾の服裝は襤褸半纏を一枚纏ひ、膝のぬけた肌引を穿き、草鞋穿で御座いまして、穢い手拭で頰冠りをして吉良邸の周圍を竹や竹、煤竹やと怒鳴て歩行て居りました、幾ら怒鳴て居りましても、竹屋さんと云ふ人が一人も御座いません殊に源吾が煤竹賣になつたのは、此の人にも似合ない商賣を始め

たもので、昔は家を建て三年の内は竹を入れるなと云ふこと申しまして、或は竹は御芽出度處にも用ひますが、又忌むことも御座います、武家では種々なる木を庭園に植付ますが、其中で葡萄は餘り植付なかつたもので、何故葡萄を植付ないと、申しますと、葡萄はなり下ると云つて、是を嫌つたもので御座います、源吾は兩國橋へかゝつて參りましたが、

「フシ」折しも吹き來る筑波おろしの風は、

して肌をつんざくばかりなり」、

橋の欄杆に寄りかゝりて隅田の流れを見て居りますと、○「夫れに居らるゝは子葉殿では御座らんか」、と俳名の子葉を云はれて源

吾が見ると、黒縮緬の五ツ紋の附た羽織を着て、茶博多の帶をめ、雪駄穿で頭巾を冠つて居り、源「イヤ是は〳〵何誰かと心得たら、植木店で御座るか、其「イヤ大高氏、暫くで御座いました例時も御變りも御座いません、源「植木店にも變りもなく、御同樣で御座るか、其「就ては大高氏、赤穗離散になり、江戸表に疾より御出になつて居る御噂は承はつて居りましたが、斯樣な處で御目にかゝらうとは思ひませんで、是は誠に拙者面目次第も御座いません、然し是も時世時節で已むを得ない、其「大高氏失禮ぢやが、是は如何で御座いますと、認めて源吾の前へ出し、源吾が見ると

年の瀬や水の流れと人の身は

源『是は何うも恐れ入つた、兄君の御手の内源吾は、　源『一寸何うぞ筆を御貸を願ひたい、筆を受取りまして、スラ〳〵と認め、源『誠に御恥しい譯で御座る、御納め下さい、其角が手に取つて』見れば

明日待る丶其寶舟

と下の句をつけました、　其『子葉殿、何うも是は御美事なる、迚も其角抔の及ぶ處では御座いません』、又筆を執て其角は

花も實もこうなるものか冬木立

其『如何で御座る子葉殿、　源『成程、失禮』、と又源吾が筆を執り

鐵もこほれる別れ路の霜、

其『子葉殿、今日の寒さは又別で御座います、　源『イヤ何うも實に年を老ると寒さが感じるもので、　其『失禮ですが子葉殿、何うぞ是を御纏いを願ひたい』、と其角は己れが着て居りまして黑縮緬紋附の羽織を源吾の肩、是を掛け、　源『是は何うも忝ふ御座る、宗匠ゆき丈の揃つた御羽織似合ましたか』、ヱヘンと笑つた、

其『オー子葉殿、大分白いものがちらついて參りました、些と何うか御暇の時は手前方へ御出を願ひますと、寶井其角は源吾に別を告げました、此の其角は江州堅田の醫者の悴で御座いまして、芭蕉の門に入り、最初は螺舍と稱へ、夫れより其角と改めました、

嵐雪杉風抔は俳友で御座います、寶晋齊其角は源吾に別れて、其『ハテとんだことをしたわイ、松浦公の御隱居より拜領をした、黑縮緬の羽織を子葉に與へました、他の品と違ひ、松浦家の定紋の附たる御羽織、是は一應御隱居に申上げて置なければならないと

フシ『肥前の國平戸の城主六萬石、松浦壹岐守殿御屋敷本所二ツ目に御座ひました、植木店の住居へ戻らうごしましたが、踵を返して二ツ目の松浦公の屋敷へと急ぎけり』、

其角は早速に御隱居に御目通りを願ひ出でました、『何に其角

が目通りを願ひ出た、速に是へと申せ、御隱居は寶晋齋を大の御氣に叶りで御座いまして、早速御前へ其角は罷出で、『オー其角參つたか、其『上には寒さの御障りもなく、御健全の體を拜し御喜びを申上げます、就まして一應上へ申上げたい事が御座りまして、罷出でました次第で御座います、『何ぢや其角、改まつた言葉、其『恐れながら先達て御上より拜領致しましたる羽織の事に就き、一應御届けに伺ひました、『オー予が遣はして羽織の儀ぢや、羽織を如何致した、其『實は大切なる羽織をフトした事より、他に遣はしまして御座います、『オー羽織を其方へ與へたのを、又其方が他へ遣はしたと申すのか、其方は正直者ぢや

の、其『恐れ入ります、』『何人に遣はした、其『俳友に遣はしました、』『オー俳友に、俳友は誰ぢや、其『子葉で御座います』『何に子葉、確か子葉と申す者は過日百韻の節、行司を致した淺野の浪士ではないか、其『左樣で御座います、就まして手前に判り兼ます事が御座います、今日子葉に會ました處、寒さうな服裝を致し居りましたから、お上より拜領の羽織を與へました、』『オー左樣か、夫は宣ひことを致した、子葉に會たなら何か出たらうナ、其『手前が斯樣つけました、』『オー何んとつけた、』其『年の瀬や水の流れと人の身はと申しました、』『ウン、年の瀬や水の流と人の身はか、子葉は何んと結句した、其『あした待

る、其寶舟と申しました、手前には其意味が少しも判りません、願くば御教への程を願ひます、』『寶晋齋、場所は何處だ、』其『會ました處は兩國橋の上で御座います、』『ウン、今日は十三日ぢやの、其『左樣で御座います、其方が羽織を子葉に與へた時には子葉が何んと申した、其『忝ふ御座る、宗匠ゆき丈も揃つた御羽織、似合ましたか、』『へ、と笑ひました、』『アー左樣か其角其方は俳人ぢや、侍の志は其方には判るまい、今日は十三日ぢやの、其『左樣で御座います、』『羽織を取らしたのは別に差支へはない、能く其方は朋友の信義を忘れん致し方、褒置くぞ』と其儘御隱居は奥へ御入りになりました、其角は御前を退り、其